

アジア民族造形学会誌

JOURNAL OF THE ASIAN ETHNO-FORMS SOCIETY

第14号



アジア民族造形学会

2014

アジア民族造形学会誌 第14号

目次

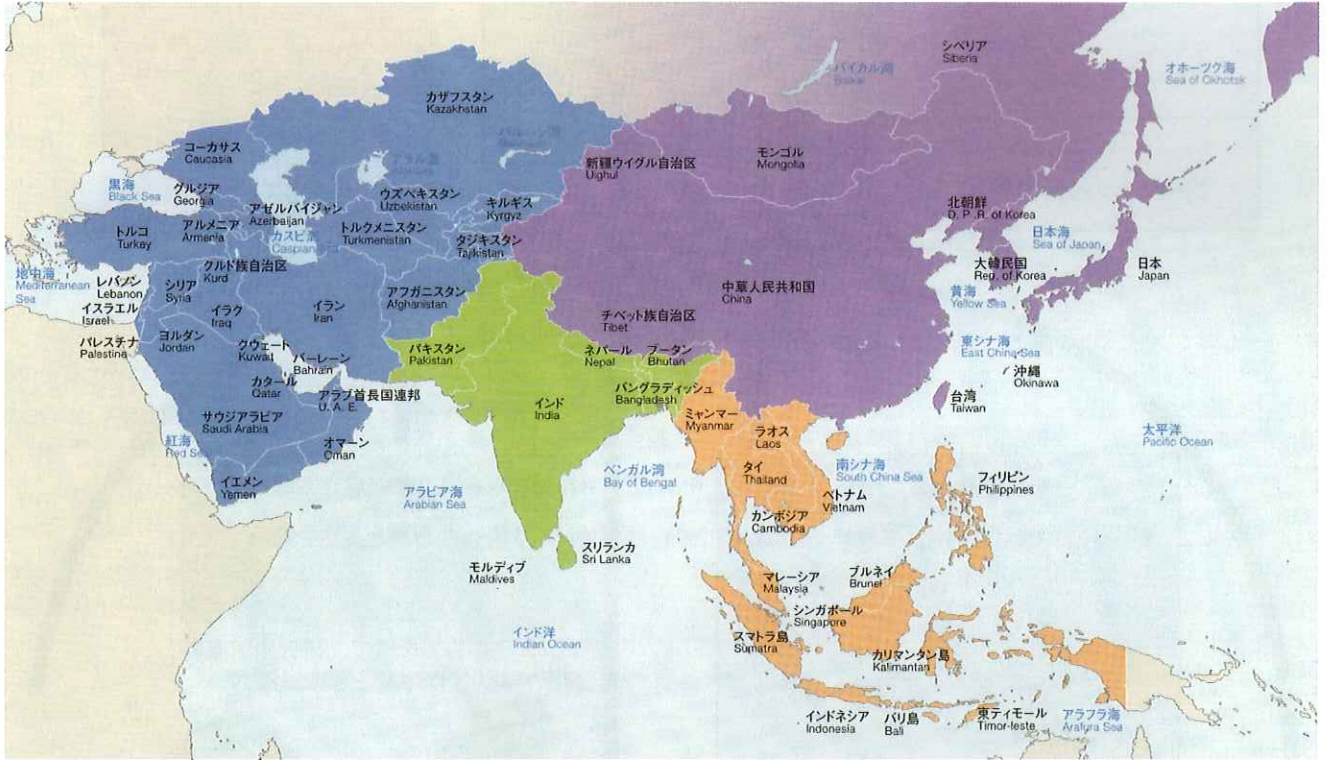
	世界初 色分けアジア全図		3
	アジア民族造形ネットワーク・システム		4
	アジア民族造形ネットワーク・システム東北アジア版		5
	アジア民族造形ネットワーク・システム東南アジア版		6
	『「アジア民族造形学」創設への長き道のり』を辿る	平野 鍾	7
特別寄稿	金子量重先生「出版記念および米寿」祝賀会を心に刻んで —『韓国国立中央博物館寄贈図録』および 『アジア民族造形学創設』出版記念—	近藤 八朗	11
論文	紅花来通説に隠れた北方ルートへの視点	日原 もとこ	25
	最上川舟運の安全祈願と文化	菊池 和博	39
	アジアにおける染付技法の新たな展開 —鉄顔料と銅顔料の混合による顔料を使った作品制作—	兪 期天 太田 公典	47
作品	平成25年度アジア民族造形学会作品展示		61
	伊藤陽子 「結ぶ」		63
	大槻圭子 「深まり行く秋の森に置き去りにした心」		64
	渋谷寿 「コウモリの飛翔 振り子玩具」		65

	西念秋夫 「須恵器蓋坏」	66
	簾美代子 「草花(和紙のはり絵)」	67
	山本和子 「森へ行こう」	68
活動報告	「精神のリレー 鎮魂の灯りをともして」 —「アジア民族造形についての理解」覚書き—	大木 道雄 69
	平成 25 年度アジア民族造形学会中部支部活動報告	平中 学 73
その他	2014 年度理事会	75
	アジア民族造形学会会則	78

世界初 色分けアジア全図

FIRST COLORED ASIAN MAP OF THE WORLD

西アジア WEST ASIA 南アジア SOUTH ASIA 東南アジア SOUTH-EAST ASIA 東北アジア NORTH-EAST ASIA



西アジア	南アジア	東南アジア	東北アジア
26 アフガニスタン、27 イラン、 28 イラク、29 トルコ、30 シリア、 31 レバノン、32 イスラエル、 33 ヨルダン、34 クウェート、 35 アラブ首長国連邦、 36 バーレーン、37 オマーン、 38 サウジアラビア、39 イエメン、 40 タジキスタン、41 ウズベキスタン、 42 キルギス、 43 トルクメニスタン、 44 カザフスタン、 45 アゼルバイジャン、 46 パレスチナ、47 クルド族自治区、 48 アルメニア、49 グルジア、 50 コーカサス	19 ブータン、20 ネパール、 21 バングラデシュ、22 インド、 23 パキスタン、24 スリランカ、 25 モルディブ	8 ベトナム、9 ラオス、10 カンボジア、 11 タイ、12 ミャンマー、 13 マレーシア、 14 シンガポール、15 フィリピン、 16 ブルネイ、17 インドネシア、 18 東ティモール	1 シベリア、2 モンゴル、3 中国、 4 台湾、5 北朝鮮、6 韓国、 7 日本

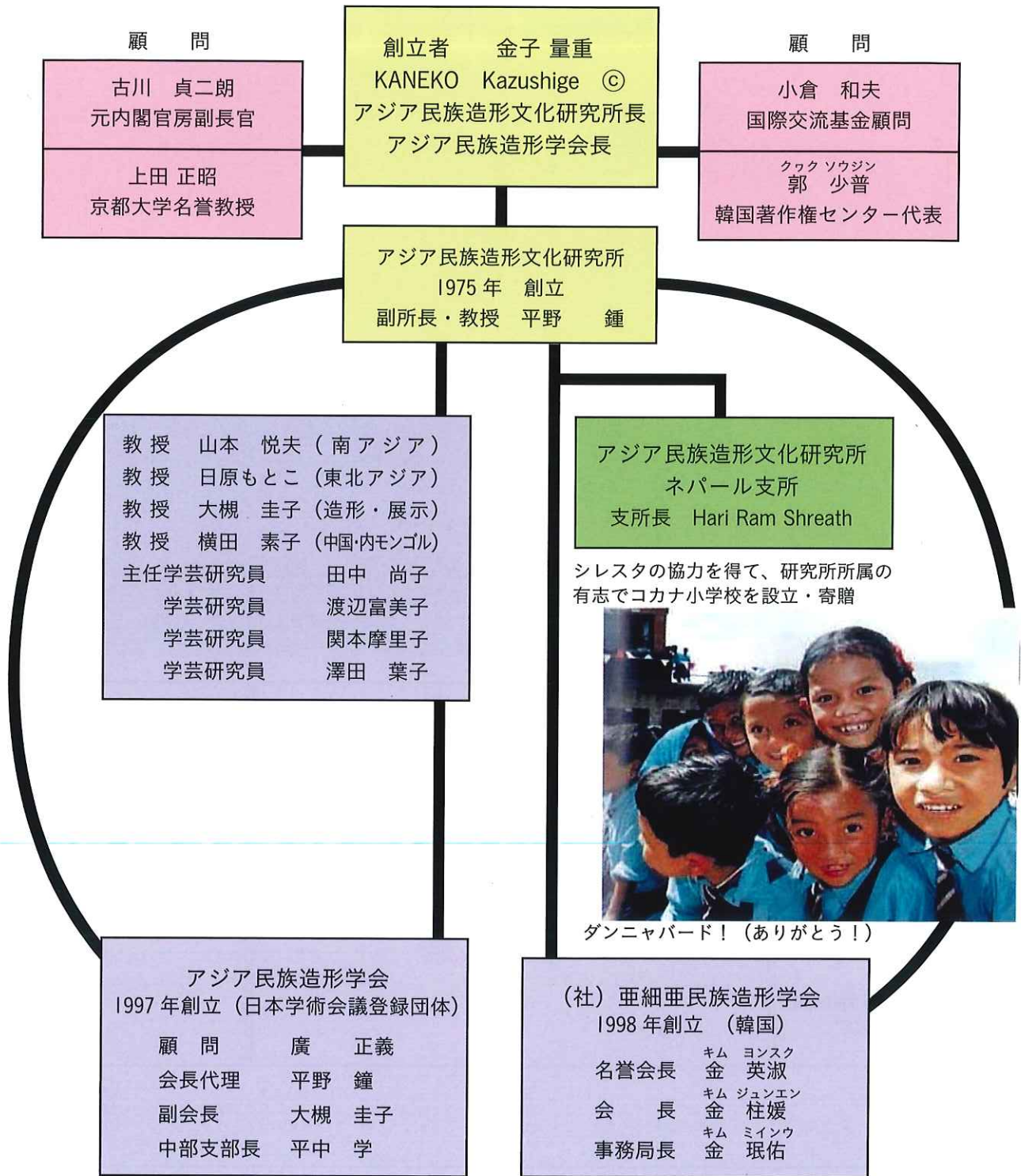
金子量重 作成
KANEKO Kazushige ©
1976

九州国立博物館、韓国国立中央博物館(2005)、ベトナム民族学博物館(2009) 金子量重記念室に掲示

アジア民族造形ネットワーク・システム

Asian Ethno-Forms Network System

アジア民族造形文化研究所 組織図 2014



シレストアの協力を得て、研究所所属の有志でコカナ小学校を設立・寄贈



ダンニャバード！（ありがとう！）

アジア民族造形文化研究所韓国学会として発足

1975年5月金子量重創立
2014年7月改定

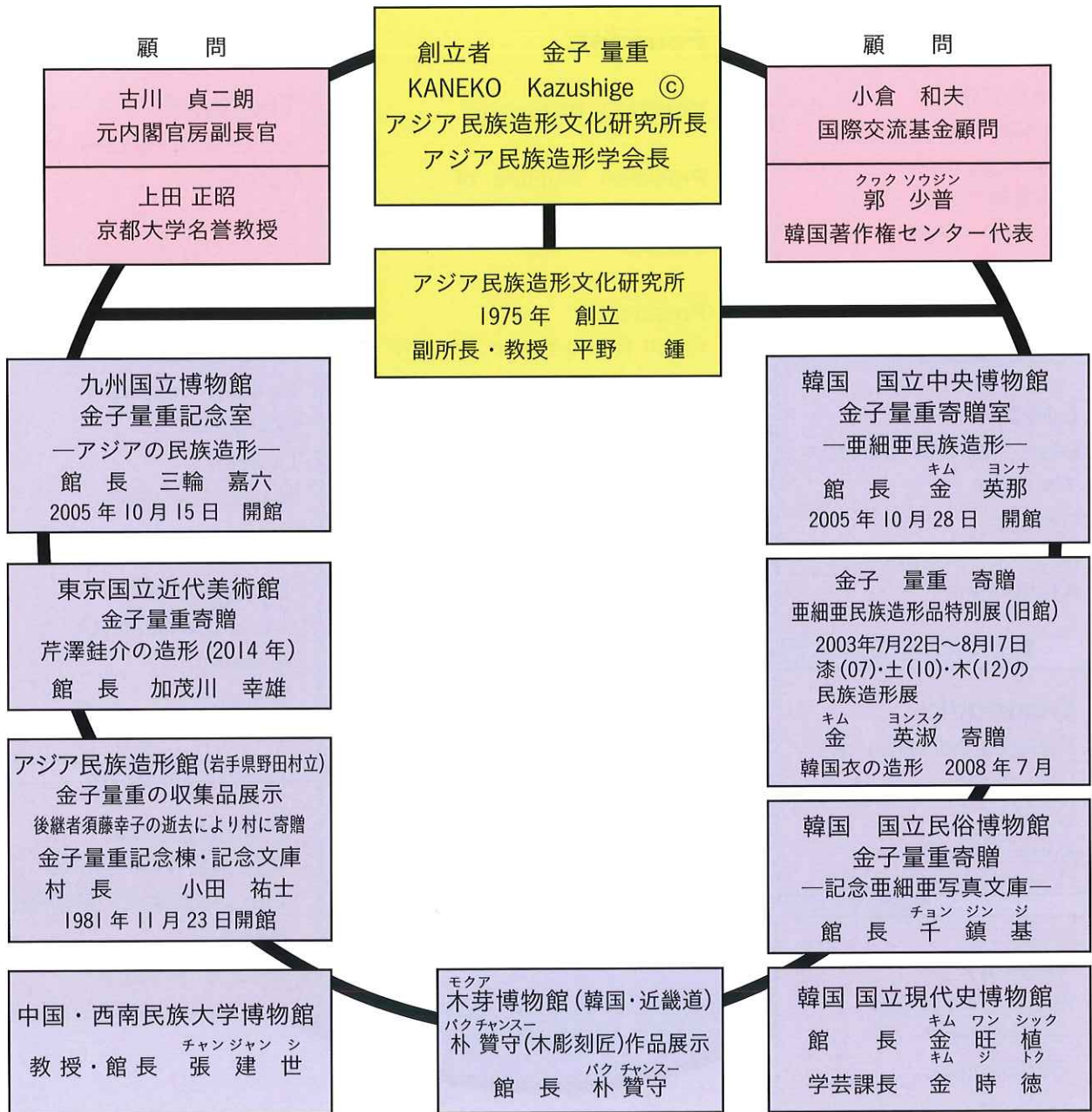
アジア民族造形文化研究所 TEL.045-364-2317 FAX.045-364-2540
アジア民族造形学会 TEL/FAX.042-576-7735 E-mail.ahirano@r5.ucom.ne.jp

※上記写真は元会員故本間伊佐子医博撮影

アジア民族造形ネットワーク・システム

Asian Ethno-Forms Network System

東北アジア民族造形ネットワーク



■各国博 金子量重記念室担当及び寄贈担当

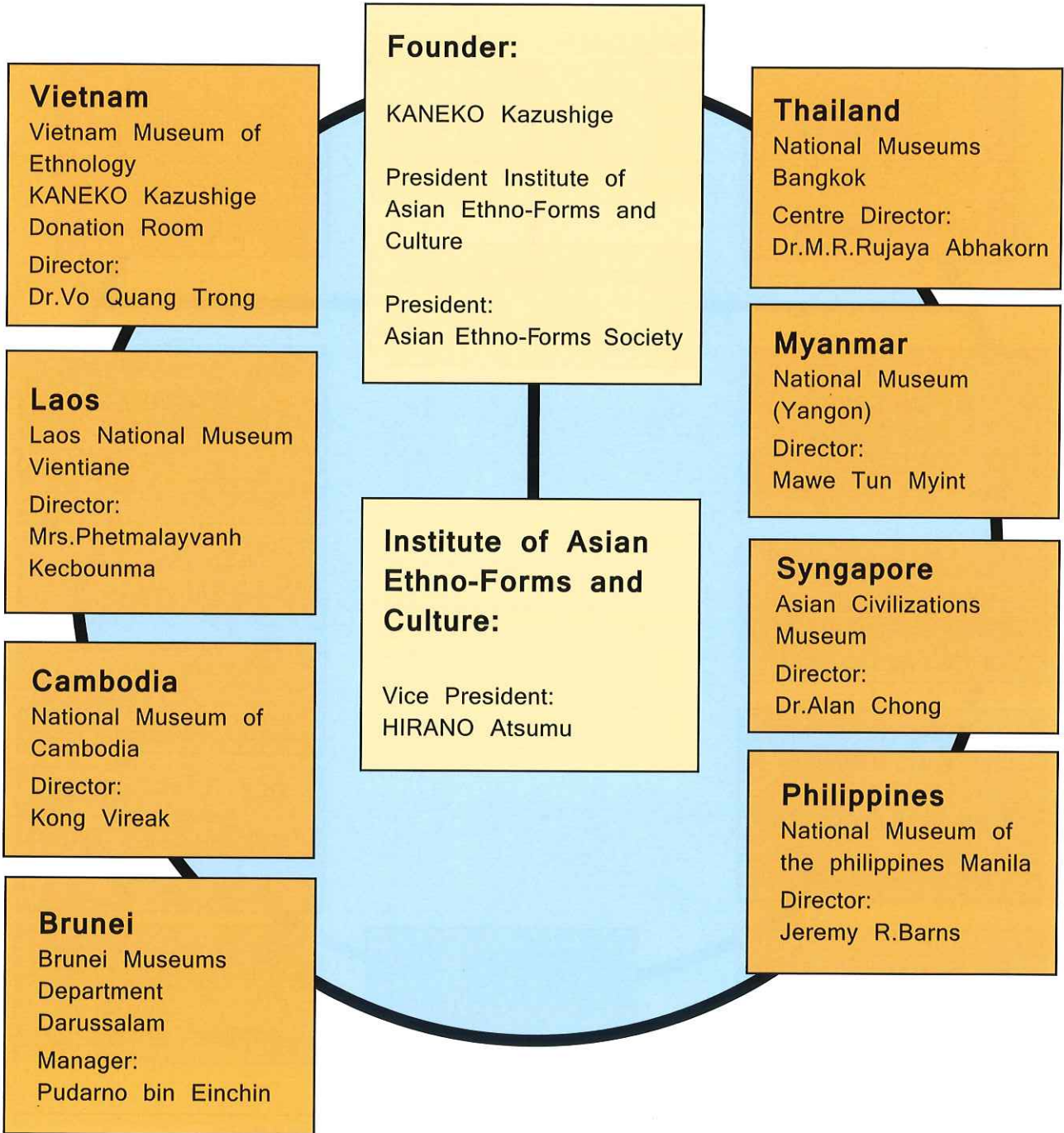
九州国立博物館	井上 洋一 (学芸部長)	楠井 隆志 (展示課長)
国立美術館	小松 弥生 (理事及び事務局長)	唐澤 昌宏 (東京国立近代美術館工芸課長)
韓国国立中央博物館	ミンピョンファン 閔 丙 薫 (アジア部長)	リュウスージン 柳 承珍 (学芸研究士)
韓国国立民俗博物館	ジャンジャンシク Jang Jang-SIK (こども館長)	ヤンキ 亮 奇 (展示運営課長)

1975年5月金子量重創立
2014年4月改定

アジア民族造形文化研究所 TEL.045-364-2317 FAX.045-364-2540
平野 鐘副所長 TEL/FAX.+81-90-5809-6239 mail.ahirano@rs.ucom.ne.jp

Asian Ethno-Forms Network System

Network in South-East Asia



Japan	KANEKO Kazushige	Tel : 81-45-364-2317
	HIRANO Atsumu	Mail : ahirano@r5.ucom.ne.jp
ベトナム民族学博物館	Dr. Nguyen Duy Thieu (副館長) Tu Wa (国際部)	

『「アジア民族造形学」創設への長き道のり』を辿る

平野鍾

序「アジア民族造形学」創設前史

* 「三つ子の魂、百まで」になぞらえば、金子先生については、「尋常小学校3年生の魂、米寿まで」ということになるだろうか。この時、横浜の鶴見の丘で、土器ひろいに熱中する。「黒い」縄文、[赤い]弥生、そして「青い」須恵器。少年は考える。「なぜ形や色や造り方が違うのだろうか」集めた“もの”を見ているうちに、興味が深まり、次々に疑問が湧いてくる。こうして生まれた「考古ボーイ」の走り？は、横浜市内の遺蹟をくまなく歩き中学4年までに、縄文、土偶、弥生、石器、須恵器など完形品を含め千点近く収集。この間、小学6年からは、上野の帝室博物館通いがはじまり「学びの場」となった。

** 金子少年の視野を広げたのは「港ヨコハマ」に生まれ、育ったためであろう。金子自身も「国際性豊かな港町に生まれたことを誇りに思う」と吐露している。氏の視野は、「ヨコハマ」から「ニホン」、そして「アジア」さらには「セカイ」と広がっていくようにご自身の中で、デザインされていたのでは、とさえ思えてくる。このことが、のちに、氏により提唱され、作成された「世界初色分けアジア全図」に繋がることになる。そして、恰も、必然であるごとく、「日本民族伝統の思想を基盤に据え、英語教育に重点を置いた」杉浦重剛創設の日本中学校に進まれた氏の父上の影響を受けておられるにちがいない。

次の飛躍は中学3年の時。なんと大山柏侯爵の「史前学研究所」へ直接電話。「すぐおいで」との返答に、欣喜雀躍、研究所に赴いた。大山は、明治の元勳大山巖元帥の次男、ヨーロッパへ留学、先史学特に旧石器の研究を志し、帰国後「史前学研究所」を設立した言わば大御所。その大山が金子少年に対し、自らが丁寧に専門用語を交えながら、教えたという。

「一念、岩をも通す」という。金子先生に強烈な印象を与えたのが「籃胎漆器」である。1920年代からの史前学研究所主催の「青森県八戸市是川中居遺跡調査」において、「籃胎漆器」が出土、金子先生は「この貴重な新鮮な姿が後々まで目に残り、この広い世界のどこかで誰かが造っているに違いない、いつか見つけてやろうと決意した」という。この執念により、なんと50年後、ミャンマーの古代都市パガンで収集に成功することになる。

「籃胎漆器」はミャンマーこそ本場、古くて14世紀前後、ほとんどが19-20世紀のもの、お釈迦様に奉るお供え物を入れる食籠(ソーン・オック)、日ごろ農作物を守る月へのお供え物(ダウン・ラン)を贈り届ける献饌具、その他にも日常生活用の器・道具類であるという。

金子先生は、大山のご指導につき御礼言上とともに、「縄文土器に夢中」と吐露したところ、即座に東京帝大人類学教室・縄文学の最高権威山内清男（やまのうちすがお）を紹介して下さった。ここでは縄文人骨に接したり、日本原人論の学説を伺うという幸運を得ることが出来たのである。

*****昭和18年、国学院大学に入学、戦争中で講義も途切れがちだったが、折口信夫、金田一京助、武田祐吉という錚々たる先生方の講義を伺うことが出来た。「常陸風土記」の輪読会では同期の上田正昭(現京都大学名誉教授)と一緒にだった。

一. 柳田國男・渋沢敬三との邂逅

戦時中のこと。「物質を対象とする考古学は共産主義」と批判されるご時世。そこで農政学の柳田國男先生の「郷土研究会」に加わる。師は、政争史を中心とする日本史を排し、上質の日本文化論を講じた。すなわち、1930年代から日本各地の農山村を歩き、各地に残る生活文化の基盤をなす祖先祭から、村人の間に語り継がれる昔話に着目、岩手県遠野地方では、村人の暮らしの奥に潜む「数百年前の面影」を確認、「日本の思想が継承」されていることを認識することになる。この会は、民俗学の専門誌「郷土研究」の創刊に繋がっていく。先生は、講義の終わりに、「君はなにをやるのか」と聞かれ「考古遺物や民俗資料などを通して、人々の生活文化に関心がある」と答えると、ポケットから名刺を出され、「渋沢敬三大兄 金子君を紹介する。指導よろしく」と。「天下の碩学が財界の大物に紹介状を書いてくださるとは！」と感激。渋沢の邸内の一角にある物置の2階の「屋根裏の博物館」＝「アチック・ミュージアム」へ。この収集資料が戦後、梅棹忠雄の努力が実を結び、1974年に至り「国立民族学博物館（みんぱく）」として創設され、1977年に開館したことを知る。なるほど、「みんぱく」の謳う、諸民族の生活を知る（衣・食・住）などの生活用具をはじめとする資料を収集、整理、保存、研究に資する、とするところは、金子の「アジア民族造形学」と重なる視点・目的を認識するのである。

金子先生の生年から青年までの「道のり」を見てくると、先生のおくなき「もの」に対する関心を持ち、そして成長し、年齢を重ねても変わらなかったことが強く印象に残る。

そして、若き金子青年を囲む「オトナ」達が、地位の上下にかかわらず、手を差し伸べ、指導して下さった幸運を思うのである。これが、人生における「出会い」とか「縁」といふべきものであろうか。

二. 韓国にはじまるアジアへの旅

アジアへの旅は韓国にはじまる。1964年、日韓経済協力協定が成立。ときを置かず、学生時代からの念願である韓国行きを実現。そして、ソウルではじめに、のちに「韓国でたった一人の日本人」と呼んで、尊敬することになる郭少晋（クワクソウジン）氏との「出会い」が実現したことは、「私にとって何よりも幸運であった」と述べている。

郭氏は、横浜市や、直江津で幼少期を過ごし、高田商業学校を経て、清水の高等商船学校(現東京海洋大学)に進んだ。後に、金子は、親しみをこめて「韓国でたった一人の日本人」と呼んで、尊敬することになる。氏は、韓国著作権協会の責任者を務め、内外の文化人との交流が深く、多くの優れた専門家や、知識人を紹介して下さった。お蔭で、韓国の民族性、信仰、歴史、教育、暮らし、民族造形等についての最高の知識、情報に接することができた。

例えば、韓国人は、「アンニョン・ハシムニカ」(あなたは、安らかでしたか)と挨拶する。実は、その前に「パムセ」(昨夜から今朝まで)襲われなかったか、という遊牧民族に共通する慣用語がつくことになる。

これに対して、日本では、「こんにちは」の後に「よいお天気ですね」等の農耕民の天気次第の挨拶が交わされる。

金子先生は、挨拶に「民族性」の特色があらわれるとして、「硬構造」と「軟構造」とに分類する。前者は、韓国で、後者には日本や琉球(テーゲ・テーゲ・グアー)やタイ(マイ・ベンライ)となる。次に喧嘩の仲裁の例だ。軟構造の日本では「まあまあ」、となる。中国福建語では「馬馬虎虎」(マーマーフーフ)《馬でも虎でもいいじゃーないか、難しく考えるな》となる。硬構造の民族ではこうならない。中国では、大雑把に言えば、北は砂漠地帯で硬構造、南は湿原地帯が多く軟構造となる。金子先生曰く、「これも人の民族性を知るうえでの基本認識にしている」と。

韓国一国での収穫の大きさ、豊かさに、アジア探訪への夢が大きく膨らんだ。同時に、アジアこそ、日本人の生活文化を学ぶ基盤と確信することになる。爾来半世紀、アジアを歩いての実感は、あまりにも土地により変化に富み、多様な自然環境の違いである。先生によれば、中国では漢民族の他に苗族(ミヤオツー)や回族など55、ベトナムには、越族やジャライ族など54、ミャンマーにはビルマ族、カレン族、カチン族など134、インドネシアにいたっては3300の島に異なる民族、とすると大変な数となる。このように見ると、先生の「アジアの国々を基盤で支えるのは<少数民族>との認識に納得がいく。

一言付言すれば、島国日本はアイヌ、大和、琉球族から成立しているのである。そして、金子先生の「東北は本来少数民族集合国家であった」の言は、大いに刺激的である。

三. アジアに日本文化の源流をもとめて

1964年の韓国行きで始まった金子先生の「日本文化の源流をもとめる旅と研究」は今年で半世紀を閲することとなった。この間、金子先生の目的地の奥深く分け入って、その土地の人々と生活し、ものをみて、あるいは使い、掘り当てた「発見」は数知れない。例えば：

- (1) インドネシア、ウズベキスタンの「衣の民族造形」は緋（イカット）と銘仙
- (2) 日本の神社の象徴「鳥居」は、タイ・アカ族魔除けの門「ロッコーン」
- (3) 「伊勢神宮」及び「出雲大社」は東南アジアの「穀倉」と「住居」が源流か
- (4) 稲の「穂倉」から「祠」へ；「穀霊信仰」の始まりと「神社」の創設
- (5) 「紫式部日記絵詞」や「源氏物語(二十四帖「胡蝶」)」に描かれている「龍頭鷓首（りゅうとうげきしゅ）の船の源流はモン族の紋章「ヒンダ：鷓」に行き着く

四. 民族造形の「来し方」と「これから」

金子先生の「活動」「業績」の広さ・深さを書き尽くすことは容易ではない。

<国内>

- * 「アジア民族造形文化研究所」
- * 「アジア民族造形学会」
- * 「金子量重記念室」開設

九州国立博物館

- * 「世界初 色分けアジア全図」

「芹沢銈介の造形」についての内外における紹介

<著書> 「芹沢銈介全集」全31巻

<美術館>

- * 日本民芸館：大原美術館・工芸館・芹沢館：静岡市立芹沢銈介美術館
：東北福祉大学美術工芸館：国立近代美術館：菊池寛美記念・智美術館

<海外>パリ・国立グラン・パレ美術館

韓国・国立中央博物館

- * 「金子量重記念室」開設

韓国・国立中央博物館

ベトナム民族学博物館

- * 「芹沢銈介の造形」

東京国立近代美術館に寄贈

特別寄稿

金子量重先生

「出版記念および米寿」祝賀会を心に刻んで

—『韓国国立中央博物館寄贈図録』および
『アジア民族造形学創設』出版記念—

保善高等学校地歴科 近藤 八朗



左よりブー・ハイ・ディエップベトナム大使館書記官、金子先生、近藤

平成 26 年 6 月 21 日土曜日、霞ヶ関の法曹会館 2 階のレセプション会場において、表題に掲げた金子先生の 2 冊の書籍出版及び米寿のお祝い会が、和やかなうちに開催された。そこに集ったのは、先生がともに喜びを分かち合いたい、と思う方々 107 名である。立食パーティーかと思いきや、正式なテーブル席での祝賀会で、料理もフルコースであった。さらに、席次表には、それぞれの方々が先生とどういう繋がりであるのか、一目で分かるように記されていた。こうしたところにも参加者お一人おひとりに対する、先生の「おもてなし」と「感謝」の心を私は感じた。そう、金子量重先生は人間が大好きなのである。

2 時間 30 分余という限られた時間ではあったが、司会の平野鍾氏の絶妙な手綱捌きにより、会はスムーズに流れ、参加者全員が、先生の人生の集大成ともいふべきご著書の発刊と米寿を心から喜び、そして、お互いに心を通わせて、楽しく、素敵なひとときを過ごせたと思う。そこに参加できたことを感謝するとともに、この一瞬間を忘れぬために、ここに記そうと思う。

会館に着き、階段を上り 2 階に行くと、受付があり、そこには先生の教え子である大妻女子大学卒業生(代表田中尚子女史)の皆さんが、すてきな笑顔で私たち招待客を迎えて下さった。これでリラックスできた私たち招待客は、先生が刊行された 2 冊の立派なご本を頂き、指定された席に着く。会場では、先生が、皆さんのお祝いのお言葉をお優しい笑顔で受けられていた。

5 分前までにほぼ全員が着席。さすがに先生のご関係の方々には時間厳守である。6 時 5 分、満を持していよいよ金子先生のご入場。皆の目が会場入口に注がれたところで、紫のチャング・チャング衣と大黒帽のいでたちで先生が登場されると、大歓声が起こった。万雷の拍手の中を先生は颯爽と歩まれて各テーブルを回り、正面のマイクのところで、「なんとか 88 歳を迎えられました。身に余る光栄です」とご挨拶をされ、主賓席に着かれた。「花婿ならぬ、金子先生がお席に着かれました」という司会の平野氏のウィットに富んだご発声で祝賀会は和やかに始まった。

会次第の説明後、ご来賓の元内閣官房副長官の古川貞二郎氏から、「米寿まことにおめでとうございます。私は厚労省出身なので、健康には敏感なのですが、先生のご年齢は八掛けが良いと思います。即ち、まだ 70 歳の若さです。だからこそすばらしいご本を出版できたのだな、と思います。先生とは十数年前、理事長の山本悦夫様から勉強会に誘われて、九州の太宰府にご一緒させて頂いたのがご縁でした。その道中は驚くことばかりでした。金子先生の集められた沢山の収集品、そして大変な博識に驚くとともに、感動いたしました。その後も、他国の方々との交友の広さや、いつまでも変わらぬ若々しさ、若者を

凌ぐ行動力に常に感服しております。これからも日本とアジアとの架け橋としてご活躍して頂きたい・・・」と、先生のパワフルな一面をご披露されたご挨拶があり、「先生、いよいよ回復！60代に戻ったかな？これだけのご本をまとめられたのは凄い！」と司会からも、合いの手が入った。

続いて元衆議院議員の水野清氏から、「50年前、岩手県三陸沿岸に博物館を作る時、総務庁長官としてお手伝いしたのが最初でした。私は金子さんより一歳くらい年上ですが、リュックサックを背負ってどこへでも行く、その精力に満ち溢れた行動力が魅力的で、私も民芸や郷土玩具に大変興味を持つようになりました。韓国、太宰府、そしてベトナムにも金子ルームがあり、金子さんの寄贈品がところ狭しと陳列されています。国際的に活躍されてきた金子さんが、こうして皆さんにお祝いされるということは、実に素晴らしいことです」とのご祝辞を頂いた。お二人のご祝辞を聴いて、先生は本当にアジアを愛し、そしてそのすばらしさを伝えるために、多くの知己を、まるで糸を紡ぐように、長きにわたって編まれていらしたのだな、それが本日の祝賀会に結実されているのだな、と感じた。

6時20分、ここで「横浜雅楽会」による「還城楽」の舞と奏楽が披露された。司会より、「先生は横浜でお生まれになったことが原点。外に対しおべっかも使わないし、常に対等でのおつきあいをされます。『還城楽』については、パンフをご一読して下さい」とあり、「横浜雅楽会」が紹介され、代表して、長尾俊教氏から、米寿・出版のお祝いと、このようなハレの場で演奏することの光栄を謝して演目が始まった。ちなみに長尾氏は、鶴見神社の宮司であられた先生の御尊父の薫陶を受けられ、先生とはかれこれ50年来のご関係であるとのことである。

鳳笙・箏・龍笛・太鼓・鉦鼓など12名の奏者とお面を付けた一人の舞人により、約20分間の演目が披露された。舞楽のゆったりとした調べに身を委ねて、日々の喧噪から脱却し、大いなる歴史の流れを感じることができた。太鼓の響きにアジアの息づかいと鼓動、そして悠久なる時の流れを感じ、鮮やかな色の衣装には大陸の雅を想い、舞人の手の動きや身のこなしにガルーダ(蛇喰い鳥)を垣間見たような錯覚を覚えた。夢のようなひとときであった。

終演後、先生から、「日本人は舶来ものが大好きです。韓国・唐・渤海・ベトナム・インド・ペルシャなどからの渡来品を、日本化することが実に巧みです。いい加減に欧米一辺倒から目覚め、アジアの文化を掘り起こしましょう。ベトナムには、『ニャーニャック(雅楽)』という芸能文化がありましたが、ベトナム戦争で人が絶え、完全に滅びました。しかし、その後多くの人々の努力によって見事に復活したのです。私はアジアの文化財を広く日本の方々につ

て頂きたい」という熱いお言葉があり、それを受けて司会の平野氏から、「金子先生のお話を伺って、『アジアの中の日本』という意味がよくわかりました。さまざまな所から、人と“もの”が日本に集まったこともよくわかりました。蛇にはびっくりしましたね」とあり、会場に集う人々も我が意を得たりという感じであった。

6時45分、いよいよ乾杯に移った。乾杯のご発声は、九州国立博物館長の三輪嘉六氏。「平成6年に水野先生のご紹介で先生と知り合いました。金子先生のコレクションをどうだろうか。日本文化の形成をアジアの文化から知る、というコンセプトで展示できませんか。ということで平成7年に本館は開館しました。現在、年間に約140万人の来館者があり、4階の文化交流展示室には金子ルームがあり、先生からの沢山の寄贈品が展示されています。私たちも図録を発行していますが、今回のご出版・米寿をお喜びすると同時に、矍鑠とされていらっしゃる先生に皆さんもあやかれるように、という願いを込めて乾杯したいと思います」とのご挨拶の後、参会者全員で、先生の米寿とご著書発刊を祝し、「乾杯」のご発声を合図に杯を交わした。こののち、法曹会館の美味しい料理とお酒に舌鼓を打ちながら、思いおもいに会話を楽しみ、また、先生のお席に改めてお祝いのご挨拶をされるなど、各々楽しいひとときを過ごした。

私は、元文教大学教授の太田泰弘氏や、ベトナム大使館書記官のブーハイ・ディエップ氏と楽しく歓談させて頂いた。太田先生は、金沢大学助教授の時に金子先生とお知り合いになられたとのことである。金子先生は、変わったことや画期的なことによく取り組まれていらしたので、凄く刺激を受けられた、とのこと、例えば、夏に開催された「紙に関する国際セミナー」では、海外から講師を招き、全国から有名な方々が集まったことなどをお話し下さった。また、ディエップ氏からは、最近のベトナム事情やベトナム語を教えて頂いた。私は高校の教師をしているので、ディエップ氏に、生徒たちに伝えたいことは何かと質問すると、「ぜひ一度ベトナムに来て下さい。両国は共通点が沢山あります。それをベトナムで見つけて欲しいのです。日本人は、『ベトナム』というと、すぐ『ベトナム戦争』を連想するようですが、今のベトナムは全く違います。それを発見してほしいのです」とお答えになられた。そのことが今でも大変印象深く残っている。また、留学生のミエンさんもご紹介下さり、その聡明さと魅力的な笑顔に彼女の留学が成功裡に終わることを祈らずにはいられなかった。ディエップ氏との語らいはとても楽しく、大いに学びとなった。

7時50分頃より、先生と特にご縁の深い方々からのお祝いのスピーチが始

まった。トップバッターは元駐韓特命全權大使の高野紀元氏で、「私は、20年前、外務省アジア担当の時に先生と知り合い、金子先生の博識に驚きました。先生は、私が駐韓大使の時、千点以上の民族造形を寄贈されたという日韓交流の慶事を伺い、感謝申し上げます。先生には、本当に様々な方をご紹介しますいただきました。そして、インドはおろか、ペルシアまで、アジアはありとあらゆる所で繋がっているのだと感銘を受けました。日本もいろいろありますが、そういう視点をもっていくと良いと思います」とお話し下さった。

続いては、明治大学名誉教授の大塚初重氏。氏からは、「先生、益々お若いですね〜。先生とは67年間お付き合いをしています、こんなに偉くなっているとは思わなかったね。(笑い)先生とは、1947年から、登呂遺跡の発掘を共にしましたが、先生には大人の風がありました。発掘中は、約1ヵ月間水筒の水のみで、農家は茄子とカボチャの皮しかくれない。特別米が配給されて、私たちはやっとなんか水団を作って食べました。先生は、明日がどうなるか分からない時、2千年前の種を見つけ、ここから先生のグローバルなご活躍が始まりました。韓国・中国・ベトナムと隈なく訪ねられた先生。私も88歳です。これからは共に頑張っていきましょう」とありました。司会から、「明大に大塚あり、國學院に金子あり、と言われたお二人の面目躍如を示すお話でした」と、お二人の絆の深さを添えられた。

そして、産経新聞客員論説委員の千野境子女史。「先生とは、韓国大使館のパーティーでの出会い頭のご縁からです。しかし、本日のスピーチは、会場に来て初めて知りました。あらかじめわかっていたらもう少しデータを揃えられたのですが…(笑い)。最初は、大変面白い小父さん、という印象でしたが、日を改めてお話を伺うと、話されることが全て滋養になったインタビューとなりました。たった一日の出会いでこんなにも面白いのは初めてで、『集めて、あげて、アジア旅ガラス』という6回連載のインタビュー記事となりました。金子さんは、幼い頃はやんちゃ坊主で、お母様からも、どうしようもない子、ということで神棚に手を合わさせられたようです。学校から帰ると鞆を放り出し、土器の破片をリヤカーいっぱい積んで、学校の先生に見せたら、褒められたとのこと。発起人の方から、これが最後と脅されましたが、先生、愛する横浜にもぜひ金子ルームを作って下さい」と楽しいスピーチをご披露して頂いた。

スピーチのトリは、國學院大学神道文化学部教授の茂木貞純氏。「朝鮮から伝わったという先ほどの雅楽は、先生が喜んで舞を踊っているように見えました。先生は、鶴見神社の神職の家に生まれられました。これが先生の原点です。國學院で神職の資格を取られ、日本の資とするために研究され、それをアジア

民族造形学として創り上げられました。もう一歩ではなく、二歩も三歩も前進していただきたいと思います。本日はまことにおめでとうございます」と、祝辞とともに先生へのエールが送られた。

ここで韓国大使館文化院長の沈東燮(シム・ドンソップ)氏のご紹介があり、氏から、「先生、おめでとうございます。先生とはご講演やセミナーで知り合い、お陰様で立派な建物ができました」とお祝いの言葉とともに花束が渡された。

この後、金子先生のかつての教え子たちである大妻女子大学卒業生 21 名の皆さんより、先生へのお祝いの言葉と感謝の花束が贈呈された。21 名の方々が勢揃いされると、艶やかな中にも迫力があり、素敵な景色であった。

代表して澤田葉子(同大学芸員課程第 1 期生)女史から、「ここにいるのは、金子先生の教えを受けた華です。本日は、発刊と米寿という二重のお祝いです。十数年前(「もっと前だろ!」(笑い)とのヤジ)、アジアとの文化交流をめざしていた時、金子先生からアジアの民族衣装を数十点貸して頂きました。それを使ってファッションショーを入間市で開催したところ、当時の中川学長より、『あなた、その衣装を着て校庭を回ってらっしゃい』と言われ、その通りにしたところ、『これこそが大学のファッションショーです』と喜ばれ、近隣の方々からも好評で、その後大学から、今度は依頼されて千代田で二度開催しました。鼻が高かったです」と先生との思い出語りも交えてお祝いが述べられた。

ここで先生がマイクを握り、「彼女は、私の講義を契機に観光庁のタイ語の通訳案内士になった方です。本当にアジアに力を入れて良かった。この娘たちのお陰で本日の会も開けました。本当に感謝です・・・」と先生がスピーチに入られようとしたので、司会から、「先生のご挨拶は後ほどありますから・・・」と促され、参会者の微笑みを誘った。師弟の固い絆を目の当たりにした瞬間であった。

続いて、ベトナム公使のグエン・フン・ホン氏からも花束の贈呈があり、お祝いを述べられた。また、先生はミャンマーのエル・コーション(エルジャ)さんを、「彼女とは二十年来の付き合いで、妹のロイジャさんはもう二十年来私の通訳をしてくれている賢い人です」と紹介された。民族衣装に身を包んだエルジャさんは、改めて会場の注目を浴びられた。

締めのご挨拶として、「たくみ」社長の志賀直邦氏から、「金子先生は神奈川県民芸協会を仕切られていらっしゃる、私は東京の民芸協会を仕切っていました。日本文化の源流はアジアにある、という先生のご高説には、大変な感銘と影響を受けました。私も国史を専攻しましたが、『アジア』といってもせいぜいミャンマーまでしか考えていませんでした。しかし、先生と出会って、

もっと西のアジアとも繋がっていることを学びました。『生活文化』とは、民族造形(服、器など)こそが大切であるということを知りました。私は、30代、40代のつもりでいます。先生、これからも励みましょう！」と、アジアを伝えられてきた金子先生を、改めて皆さんにアピールされた。

ここで、最初に受付で引いた番号札による、お待ちかねの「福引き」タイムとなった。引き出物ではなく、「福引き」形式の遊び感覚で、皆さんへ「感謝」の意を表現されるとは、いかにも金子先生ならではのご配慮である。そして、この福引きには、途中で気付いたことだが、ハズレが無いのである。「全ての人にありがとう！」という先生のお気持ちが込められた品々は、「金子先生が何十年もかかって集められたもので、今では二度と手に入らないものです」という司会の平野氏のアナウンスにもあった通り、貴重なものばかりである。私は「77番」で、終わりの方であったが、実に色合い深い陶器を頂いた。これから大事に使わせて頂こうと思う。

お開きに、金子先生から皆さんへ答礼のご挨拶があった。「こんなにも途方もないものを集め、狭い家がますます狭くなったので、ベトナム・韓国・九州の博物館に貰って頂けた時、女房はどんなにか安心をしたことでしょうか。女房のお陰で私はこうした仕事のできたのだ、と思います。女房の偉さが今しみじみと分かります。女房は、今寝たきりで、出がけに手紙をくれたのですが、忘れちゃいました。名のあるものだけが尊い時代は終わりを告げました。役人に、文化とは何だ？と尋ねたら、『芸術文化』と答えましたが、違うのです。『衣、食、住、信仰・儀礼、学び、遊び、芸能、生産・交易』の8主題に絞った『生活文化』こそが、文化の基本なのです。それは、『農耕、狩猟、漁労、遊牧、森林文化から陶磁、染織文化』などであり、それと並んで、その一分子として“芸術文化”があるのです。日本人とは何だったのか、茂木先生の言葉は尊い。『基つ教え』、即ち、日本文化の源流はアジアにこそ学ばなければならない。日本ができるまでに韓国と融け合ったのか。滋賀、京都、大阪では韓人が多く混血しました。昨年10月、東京の私学協会主催で、『日本文化の源流』について講演をさせて貰いました。明日を担う子どもたちを教えていく中学・高校の先生こそ尊い。大学ではないのです。そして、その子たちによって、将来日本のために一肌も二肌も脱いでくれる国を増やしていくことこそが、日本の安全と平和に寄与するのではないのでしょうか…皆様、本日はほんとうにありがとうございました」

先生のアジアへの熱い思いで会が締まったところで、祝電の披露があり、最後に、本日の佳き思い出として、終日カメラマンに徹せられた、百年書房代表

取締役の藤田昌平氏が記念写真を撮って下さり閉会した。名残を惜しみながら皆さん笑顔で散会した。

長々と筆を走らせてきたが、私はこの会にご招待を頂けたことを本当に感謝している。先生の集大成ともいふべきご著書を頂けたことは無論(貴重な衣服や土器などの写真や図版、そして先生のご研究の歩みなど一目で理解できる素晴らしいご著書である)だが、先生の今まで関わられた方々と出会えたこと、知り合えたこと、そして、心を通わせられたことをとても嬉しく思う。会の途中で、金子先生が、「近藤先生だからディエップさんの隣にしたのだよ」というお声をかけて頂き、胸が熱くなる思いがした。まだ先生との日も浅い私のような者にもそれほどまでに心を砕かれる先生。だからこそ、ともすれば欧米一辺倒だった時代からアジアを重視され、それを学び、研究され、その大切さを人々に説かれていらっしやっただろう。

私も高校で生徒と共に「世界史」を学んでいるが、近年は、西アジア史もだいぶ脚光を浴びてきた感がある。しかし、東南アジア史やアフリカ・南米・オセアニア史などは、まだまだ扱いが薄い(それでも新版の「世界史」教科書は、かなり厚くなってはきたが)。私自身も浅学の誹りは免れないが、金子先生と出会え、学ぶことによって、東南アジアを初めとするアジア世界に注目し、特に「生活文化」を学び、それを生徒に伝えていくことこそが、未来の世界を明るくしていくのだと、この会に参加して痛感した。

参加された方々それぞれが、何かを感じ、あるいは学んだとても素晴らしい会であった。

結びに、この会を計画された平野鍾氏を初めとする発起人の方々、かいがいしくお手伝いをされた大妻女子大学の卒業生の方々、素晴らしい雅楽をご披露下さった横浜雅楽会の皆様、素敵なスピーチを下された皆様を初めとする全ての参会された皆様、法曹会館の皆様、そして、何よりもこの会を中心になって盛り立てられた金子量重先生に心からの感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

各界代表者の祝辞に大輪の花開く金子記念会



107名の招待客で会場は大盛況



午後6時、金子先生が入場



米寿を祝う紫のチャンチャンコであいさつ
左は水野清元衆議員議員



祝辞を述べる古川貞二郎元内閣副官房長官



乾杯の音頭は三輪嘉六九州国立博物館長



司会は金子先生の盟友、平野鍾氏



横浜雅楽会による「還城楽」の舞が披露された



鳳笙・箏・簞箏・龍笛・太鼓・鉦鼓など奏者は12名



雅楽に魅了される招待客たち



大塚初重氏（明治大学名誉教授）



高野紀之氏（元駐韓日本大使）



千野境子氏（産経新聞客員論説委員）



茂木貞純氏（國學院大学神道学部教授）



左から渡部典子、金子先生、エル・コ・シヨン（ミャンマー）



金子先生長年のコレクションを福引でおすそ分け



大妻女子大卒生から花束を贈られ感謝の瞬間

金子量重先生祝賀会

出席者席次一覧

2014年6月21日、金子量重先生の『韓国国立中央博物館寄贈図録』、『「アジア民族造形学」創設への長き道のり』出版、及び先生の米寿をお祝いする会が、霞が関の法曹会館にて盛大に催されました。各界の代表から、教え子の大妻女子大卒生、加えて韓国、ベトナム、ミャンマー、イランの方々も参加、国際化にふさわしいパーティーが実現しました。

【松】

- 金子量重 (アジア民族造形文化研究所長、アジア民族造形学会長、元国連、「アジア無形文化遺産国際専門家会議」日本代表)
- 水野清 (元衆議院議員)
- 佐野宏哉 (元水産庁長官、漁業交渉代表、国際協力事業団副総裁)
- グエン フォン ホン (ベトナム公使)
- 高塩 至 (元文化庁次長)
- 三輪嘉六 (九州国立博物館長)
- 千野境子 (産経新聞客員論説委員)
- 加藤淳平 (元ベルギー、オマーン大使)
- 井川一久 (元朝日新聞編集委員、ベトナム支局長)
- 菅沼光弘 (アジア社会経済協力会長、元公安調査庁調査部長)

【竹】

- 古川貞二郎 (元内閣官房副長官 = 9人の首相に仕えた功労者)
- シムドンソフ
沈東燮 (韓国大使館韓国文化院長)
- リュウスージン
柳承珍 (韓国国立中央博物館学芸研究官、京都大学大学院博士課程)
- 小松弥生 (国立美術館理事兼事務局長)
- 後藤祥子 (前日本女子大学学長)
- たかこ
鈴木宇子 (京都大学霊長類研究所教授、
(社)「オランウータンと熱帯雨林の会」理事長夫人)
- 下山雅也 (国際交流基金アジア・センター総務部長)
- 露木順一 (元神奈川県開成町長)
- 原田美佳 (韓国大使館韓国文化院専門委員、大妻女子大卒生)

【梅】

- 大塚初重 (明治大学名誉教授 = 考古学) = 1947年 登壇以来の良き仲間)
高柳 智 (岐佐神社名誉宮司 = 伊場遺跡を発見し発掘調査隊を編成)
下津谷達夫 (元國學院大学教授 = 考古学)
石部正志 (元宇都宮大学教授 = 考古学)
川岸俊彦 (元ニュートーカー不動産〈株〉常務取締役)
千代延恵正 (元東京大学東洋文化研究所文部技官 = 考古学)
守屋幸一 (考古学者)
竹林征三 (風土工学研究所長)
本間 勝 (技術士、情報総監)
森 雅美 (デザイナー)

【寿】

- 林屋晴三 (元東京国立博物館副館長)
井上洋一 (九州国立博物館学芸部長 = 金子量重記念室担当)
楠井隆志 (九州国立博物館展示課長 = 金子量重記念室担当)
唐沢昌広 (東京国立近代美術館工芸課長 = 金子量重寄贈「芹澤銈介の造形」担当)
志賀直邦 (〈株〉たくみ社長)
石丸重尚 (日本民藝館常務理事)
杉山亨司 (日本民藝館学芸部長)
村上豊隆 (日本民藝協会編集部)
小林一 (〈社〉アジア・サイエンス・カフェ会長)
ソレマニエ・フィニ・アミール (イラン、千代田トレーディング〈株〉社長)

【福】

- 茂木貞純 (國學院大学神道文化学部教授)
石川正人 (横浜・師岡熊野神社宮司 = 金子家と親子三代のご縁)
佐野和史 (横浜・瀬戸神社宮司 = 金子家と親子三代のご縁)
岡部定征 (中目黒八幡神社宮司)
粟飯原雅胤 (あいはらまさたね) (千葉・寒川神社宮司)
渡部公磨 (広島・邇保姫神社宮司 = 亡父が金子と同級生)
エル・コーション (ミャンマー・カチン州ジンポー族、在京)
田中栄一 (國學院大学同級生、ミャンマーからベトナムへ同行)
矢島早苗 (北沢・八幡神社宮司)
内田祐一 (かえつ有明中学高等学校教諭)

【禄】

ブーハイ・ディエップ ベトナム大使館書記官

- 山本悦夫 (アジア民族造形文化研究所教授、同学会理事)
近藤八郎 (保善高等学校教諭 = 金子作成「世界初色分けアジア全図」を世界史の授業に提示、学生らの反応大と)
太田泰弘 (元文教大学教授 = アジアの食文化文献研究)
佐藤センコウ (ミャンマー・カチン州ジンポー族)
田中佐知子 (茶道家、ミャンマーへ同行)
大山真奈 (茶道家、ミャンマーへ同行)
小野沢孝 (茶道家、呉服商)
大木道雄 (造形作家、学会員)
浅川映子 (ギャラリー「桜珠」)

【桜】

- 柴田昌彦 (元高島屋宣伝部長、営業本部長)
山田 恂 (建築家 = 金子指導による広瀬美恵助手引率の大妻女子大生らとタイ・カレン族3集落の研修調査に参加)
金 栄愛 キム ヨンエ (文教大学講師 = 韓国語)
岩橋由紀江 (画廊「俊」経営 = 茅ヶ崎)
角田ひさ子 (ペルシア書道家)
花里麻里 (寛実記念菊池智美術館学芸員)
井上樹里 (かえつ有明中等高等学校教諭 = 美術)
深谷俊二 (呉服商、学会員、元日本アジア塾事務局長)
田村尚子 (モダン・バレリーナ、学会員)
日原もとこ (アジア民族造形文化研究所教授、同学会理事)
初鹿野マイ はつかの (ベトナム)

【鶴】

- 中出英臣 (中山恭子参議院議員秘書)
石井典子 (金澤工業大学虎門大学院主幹、ライブラリー・センター主任、大妻女子大図書館司書課程卒生)
和栗都美子 (国立劇場、大妻女子大卒生)
後藤恵子 (染の造形作家、大妻女子大卒生)
井口琴美 (大妻女子大卒生)
布施加代子 (大妻女子大卒生)
ミエン (ベトナム)
石塚まさみ (大妻女子大卒生)
植竹種美 (大妻女子大卒生)
八巻誠子 (大妻女子大卒生)
中村次郎 (画家、アジア民族造形学会理事、長野支部長)

【亀】

- 斎藤善郎 (日本学生支援機構、元日本アジア塾会員)
斎藤克子 (夫人)
大網美代子 (大妻女子大学講師、大妻女子大卒生)
柴田貴子 (大妻女子大卒生)
斎藤広子 (大妻女子大卒生)
宮地知恵 (大妻女子大卒生)
野元容一 (アルバック〈株〉ソフト課長)
野元恵子
星野健三 (ほしのや石材社長)
星野真須美
佐々木孝道 (水野清秘書)

【桃】 幹事

- 平野 鍾^{あつむ} (アジア民族造形文化研究所副所長、アジア民族造形学会会長代理)
大槻圭子 (アジア民族造形文化研究所教授、アジア民族造形学会副会長)
武井秀行 (かえつ有明高等学校教諭)
小野和伸 (国學院大学講師 = 金子家とは親子三代のご縁)
田中尚子 (大妻女子大卒生)
渡辺富美子 (大妻女子大卒生)
関本摩里子 (大妻女子大卒生)
澤田葉子 (大妻女子大卒生)
小沢増美 (大妻女子大卒生)
常盤順子^{ときわ} (大妻女子大卒生)
岡村かがり (成城学園高等学校教諭、大妻女子大卒生)
八百紀子 (大妻女子大卒生)
藤田昌平 (百年書房代表取締役)
馬場美智子 (元アジア民族造形文化研究所総務主任)

紅花来通説に隠れた北方ルートへの視点

Perspective on northern route hidden in safflower introduction common belief

アジア民族造形文化研究所 日原もとこ

Institute of Asian Ethno-Form and Culture

HIHARA Motoko

I. はじめに

本稿の主題は、本来、紅花が我が国へ渡来したルーツを辿ることが主目的であったが、本研究に着手して以来、約10年間が経過するなかで、周辺事情を色々と調べているうちに、これまで、私たちが受けてきた歴史的な一般常識や専門知識ですら、照合すると多くの省略、或いは抽象的記述によって、かえって底なしの謎をかかえることになってきた。古文書には大和朝廷成立以降、政権下で認めた公式ルート以外は不法とみなされ、特に東北地域における地方豪族集団は“蝦夷・えみし”と位置付け、彼ら独自の版図や交易事情についても殆ど関与しておらず、状況把握も出来ていない。^{注1)}

そこで、本稿は視点を絞り、一紅花は誰によってその価値が見出され、誰によって運ばれ、誰によって継承されたのか？—について取り上げることにした。

但し、砂漠性の紅花自体、エジプト—中国、又は古朝鮮半島—日本到達までが、シルクロードを經由してきたとする史実についての検証ではない。

公認の歴史書は常に時代の勝者による記録であり、敗者のそれは常に偽書であるか低次元の存在として扱われてきた不条理があった。水面下に潜った別のルート、いわば、表街道に対する裏街道に目を向けてみると、私の中には新たな風景が展開してきたが、当然のことながら裏道は謎だらけで道標などがある筈も無く、さりとして引き返す道も見失ったのが本音である。従って、ここでは手探り歩きの途上で見聞した幾つかの場面が結び付き、畏れ多くも紅花渡来に関係する北方ルート探求の緒に就いた。

II. 研究着手への経緯

古来、我が国の染色技術はおおよそ、1700年間の長きにわたって天然素材による草木染めに頼ってきた。中でも最高峰の地位を保ち続けたのは紅花染め：「紅＝呉藍（くれない）」、すなわち紅花から抽出した赤い色素にあった。それは「紅一匁金一匁」と称せられたことからしても、王朝、貴族、戦国武将や江戸時代では豪商など時の権力者が占有する染料として庶民には手が届かない代物であった。その紅花こそ、日本一を誇る山形県の「最上紅花」であり、その仕掛け人が江戸時代に北前船を活用した近江商人であり、多くの紅花豪商を輩出して同県の基幹産業を支えてきたのである。しかし、現在は過去の輝かしい繁栄物語として語り継がれるのみで、今なお山形市内の繁華街に点在する重厚な店蔵づくりの建造物群が当時の面影を僅かに留めている。

これらが、本県に縁を結んだ定年前後からの研究テーマとしての背景である。しかし、必然的な動機になったのは、私が大学教員としての晩年に、大学付設機関の東北文化研究センターに受託された文科省プロジェクト：「東アジアの中の日本文化に関する

る総合的な研究」が始まり、その一環で、私は紅花を中心に据えながら、シルクロードを結ぶオアシス都市の風土色について映像アーカイブスの制作を申請した結果、思いがけず許可されたことに始まる。現地調査は第1回目が2002年5月、映像制作にあたり4-5名のチームを組んで開始され、以降、第5回目の2006年7月まで5年間の取材調査が行われた。報告書作成に当たり、考察にはエジプト、トルコ、カシュガル、安東河回村、シベリア（トロイツコエのナーナイ族村）などの個人的現場体験を参考として、全体の研究成果は各40分程度のビデオ作品5本と報告書にまとめ、本プロジェクトは終了した。しかし、ビデオ作品の説明シナリオや報告書をまとめる過程で、全てが門外漢だった私にとっては、並行して歴史、地域事情、民族性への知識や派生する、周辺事情も学ばねばならず文字通りの自転車操業だった。それが、プロジェクト終了後も依然として続いており、とりわけ、歴史については謎が深まる一方で、気づくと自ら底なし沼にはまり込んでいた。唯、救いはその分だけ、競合のないニッチ的研究テーマになることだ。

Ⅲ. 研究途上で発生した歴史的認識の大幅な修正

近年、我が国への紅花渡来時期が、大幅に書き換えられる驚くべき発表があった。一女王卑弥呼（ひみこ）で知られる邪馬台国の有力候補地、奈良県桜井市の纏向（まきむく）遺跡で、三世紀前半の溝跡にたまった土から大量のベニバナ花粉が見つかり、市教育委員会が二日、発表した。それらは織物の染料とみられ、国内で確認された最古の例―

（東京新聞 2007年10月3日朝刊）とあり、纏向古墳発掘における大量ベニバナ花粉の出土は邪馬台国候補地として有力なる証拠があがり、世間の耳目を集める一大事件であった。

この新しく発掘された纏向古墳からは弥生時代後期～古墳時代初め（3世紀中頃）の溝跡から採取した土に、ベニバナの花粉が大量に含まれていたのである。

紅花の渡来時期が藤ノ木古墳の記録からは、一挙に300年間も遡ったことになる。つまり、紅花渡来は古墳時代で、大和政権成立以前の話になった。これが、実際に倭王卑弥呼の本拠地となれば研究着手から5年と経たない間に、私のみならず、それ以前の歴史認識はとんだ間違いを犯していたことになる。それは「魏志倭人伝」の中の次の下線部分にある。―「其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木狢短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬」― つまり、卑弥呼が魏王に赤や青の織物を献じたとあるが、ここで記されている「絳」とは“くれない”と読むことは調べていたが、これ程遡っての紅花渡来はあり得ないとの思い込みから、この「絳」は「日本茜（あかね）」又は「蘇芳（すおう）」で、「青」は前世紀からあるとされた「藍」ではないかと推論していたのである。これによって大和政権成立前の我が国は、全国に点在する地方分権集合国家の状況下にあつて、夫々が大陸との交流があった可能性を示唆し、文献にも載らないルートでベニバナは古くから渡来していたことになる。

それまでの常識は、わが国へは藤原京期（694年～710年）の高松塚古墳から発見された壁画に描かれた通称「飛鳥美人図」に見られるストライプのスカートの紅色、頬

紅や口紅の化粧法等^{注2)}について壁画としての分析はなされているが、実際に用いられた化粧料としての記述はなかった。

その後、2008年に藤ノ木古墳（西暦587年）の石棺からは、大量の紅花花粉が撒かれていたニュースがあり、一時、染料ではないかとの見方があったが、分析結果ではベニバナの生花が供花として石棺に納められていた可能性が推定された。これも、渡来時期の前提を覆されるショッキングな出来事であった。何故ならば、研究着手当初の常識は遣唐使等が持ち帰った唐の美術工芸品や、或いは高句麗の僧曇徴によって初めて、公式に紅花染めや臙脂（紅花から抽出された顔料）の技術が日本へ紹介されたことになっていたのである。

ここで私の関心事と視点が初期から段階的に変化していった過程を概略すると、

- ① 紅花の原産地に関しては諸説があり、大半はエジプト産であるがその信憑性は？
- ② 何故、砂漠性の植物が我が国では都から離れた雪国山形に根付いたのか？
- ③ 「紅一匁、金一匁」の喩えは他国でも同様であろうか？
- ④ シルクロード諸国の紅花事情は如何なものか？何処で栽培されているのか？
- ⑤ 紅花が運ばれたシルクロードはいくつもルートがあるとされるがその拠点は？
- ⑥ 紅花を運んだシルクロード以外に別ルートが存在するのか？
- ⑦ 前2～3世紀に匈奴由来の化粧法が現代の朝鮮半島に存在する謎に迫る。
- ⑧ 山丹交易という北方アジア経由の隠れたルートがあったが、紅花の痕跡は？
- ⑨ アムール河下流域住民とされる交易商人山丹人の正体とは？

此処に挙げた、8つの過程については当会にて①～④までの考察を映像記録によって口頭発表しており、本稿では上記項目の⑤～⑧までを視野に、紅花を通して知りえた周辺事情と、中国本土を外れた渡来ルートの可能性について推論する。

IV. 紅花は張騫によって初めて古代中国にもたらされた。

シルクロードを越えて古代中国へ紅花がもたらされたのはBC.2世紀のことだった。それを古代中国へ最初に持ち帰ったのが張騫である。彼は漢の武帝の命により、毎年、本土を荒らし回る宿敵、匈奴を挟撃するための同盟関係を築く狙いで大月氏国へ派遣された使節であったが、彼は出国すると早速、遊牧騎馬民族の匈奴に捕まり、11年間、囚われの身になりながらも隙を狙って大月国到達を果たした。結果的に主目的の同盟協定は不発に終わったが、様々な他国の情報提供とルート開拓に大きな成果を漢にもたらしたとある。ただ、史記「匈奴列伝」を調べても、「紅花」については張騫が持ち帰ったとする記述はなく、その後も3回派遣されているが、その折に持ち帰ったものであろうか？

1. 紅花で化粧していた匈奴の女性たち

秦、漢の時代、古代中国にとって遊牧騎馬民族の匈奴とは、毎年農作物の収穫期には恒例行事として略奪と襲撃を繰り返す天敵の存在だった。その匈奴が命の次に大事にしていたものが天馬と紅花であった。何故紅花が貴重であったかは、史記列伝-匈奴伝によれば、冒頓（ぼくとつ）単于（ぜんう＝首領の意味）の公主（＝后）を始め、女性達の化粧紅を採取するためだった。しかし、紅花の色素を手に入れるには相当量

が必要となり、遊牧民の彼らは秘やかに紅花の栽培基地を持っていた。その場所とは現在の甘粛省にある祁連山の麓、山丹軍用馬場である。しかし、張騫が西域から帰国後、間もなく匈奴は漢の衛青・霍去病（えいせい・かくきよへい）将軍によって壊滅に帰し、万里の長城の外、北漠に消え失せたとある。以来、漢民族は匈奴の所有財産である、この秘密基地と同時に広大な紅花栽培地をも獲得したのであるが、私の中に以下二つの疑問が残った。

問 1 匈奴女性は紅花を使ってどんな化粧したのか？

問 2 壊滅した匈奴の支流部族は如何にして紅花文化を継承してきたか？

2. 紅花にちなむシルクロードの一般的概念とは？

「シルクロード」とされる呼称の由来は、はるか昔のことではない。記録からしても明治初期のことである。その呼称の始まりは地理学者リヒト・ホーフエン(1877, 独)の著書：

『China』の中で、「Silk Road」という言葉を使ったことに始まり、その後、ヘディン(考古学者, 典 1876)や、オーレル・スタイン(探検家, 英 1862)等が

「Silk Road」を著作の中で用いたことから、国際的に公認されたと考えられている。太古から存在した「シルクロード」とは中央アジアを横断して東西のオアシス拠点を結んだ様々な文物、宗教、科学技術、人的交流、或いは部族抗争が繰り返された交通網であって、その名が示すように「絹の道」一本に代表される類のものではなく、人類の歴史そのものであった。

しかし、一般的には冒険家でもない人々にとって、ゴビ砂漠やタクラマカン砂漠等は殆ど異次元の世界である。私もその一人であったが、当事者になってしまうと、最低、シルクロードの概念を頭に入れる必要に迫られ、調べるにつれて、想像よりも多岐に亘るルートが存在し、地図を眺めても皆目イメージが湧かないものである。また、加えて「海のシルクロード」とされるルートも存在するのであるが、此处では割愛したい。今回は陸路に限り、歴史的に古くから利用されたオアシスルートに絞ると一般的には大筋、次の3つのルートに絞られる。

3. 張騫が歩いたシルクロードのオアシスルートとは

①西域南道：敦煌－ホータン→ヤルカンド→パミール高原を結ぶ南方ルートで、タクラマカン砂漠の南縁を辿るので別名：「漠南路」とも呼ばれる。オアシスの道の中では最も古く、紀元前2世紀頃の前漢時代には確立していた。距離的には最短であるが、極めて過酷なルートであり、唐代7世紀にあつて玄奘法師は仏教経典を学びに印度へ向かう際、艱難辛苦を舐めながら天山北路を辿って高昌国(現在のトルファン盆地)に立ち寄り、国王から永住を所望されるなど厚遇を受けたが、帰途、

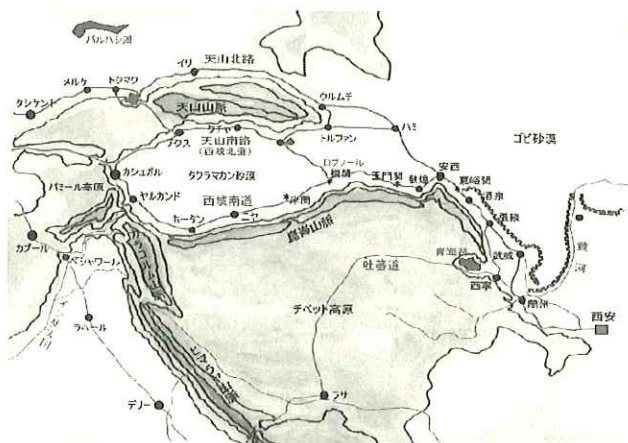


図 1 古代シルクロード3つのオアシスルート
(出典：新詳世界史図説・浜島書店より)

17年間の歳月を経た後、このルートに変えて高昌国に立ち寄ると、唐軍によって城は廢墟と化していたという悲話が残る。肝心の張騫が復路に利用したのはこのルート。往路で9年間も匈奴に拘束された苦い経験を繰り返さないためであったが、ここでも再び捕まり、1年間の抑留生活を送っている。

②天山南路（西域北道）：敦煌→コルラ→クチャを経て、天山山脈の南麓に沿ってカシュガル→パミール高原に至るルートで、「漠北路」とも呼ばれる。このルートは西域南道とほぼ同じ時代にまで遡り、最も重要な交易路であった。このルートは楼蘭を経由する方法と、敦煌又は安西→ハミ→トルファン→コルラに至る方法があったが、前者は地下水枯渇で楼蘭からオアシスが消え自然消滅した。

③天山北路：敦煌又は安西→ハミ又はトルファン→ウルムチを経て、天山山脈の北麓沿いにイリ川流域→サマルカンドに至るルート
張騫が往路に利用したのは、このルートであったと推察されている。

4. 盲点となっていたもう一つの草原ルート（草原の道）

④草原ルート：長安→モンゴル→カザフスタン→ロシア南部→黒海に至るルート、
→それは遊牧騎馬民族の本拠地だった！

本研究を進めるうち、遅まきながら匈奴にとっての生活手段は馬であったことに改めて気づかされ、全く意識下になかったステップルートの存在が、俄かに表面化した。若しも砂漠地帯で戦えば機動性に欠け、栄養源となる草がない。彼らが生き延びられたのは草原の道を使っていたからである。馬は常に部族抗争の運命に曝された騎馬民族不可欠の戦闘手段であり、馬乳はエネルギー補給のための栄養源であり、時には馬自体が食料だった。昔からスキタイや匈奴、突厥等多くの遊牧民騎馬民族が、利用してきた生命線であった。最近、俄かにクローズアップされてきたが、実は最も古い歴史^{注3)}を持っていたのである。

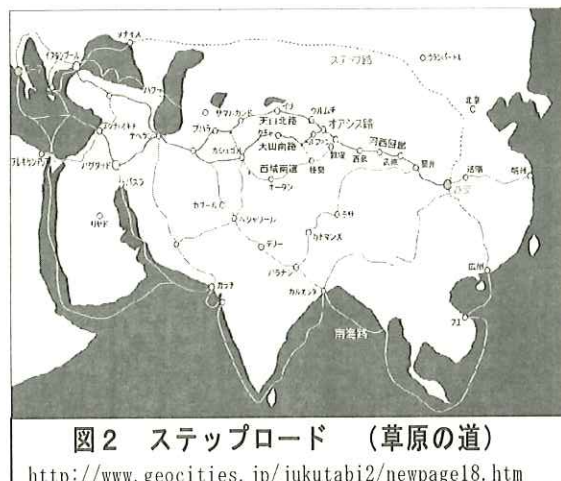


図2 ステップロード（草原の道）

<http://www.geocities.jp/jukutabi2/newpage18.htm>

5. 西域、ウイグルにも紅花染色の痕跡見当たらず

2006年7月、前記、問1を受けて手がかりを探すために、今回は現代中国でも紅花栽培地として四川省とともに二大産地となっているウイグル地区に焦点を当て調査地とした。紅花栽培地は8世紀初めに北庭都護府が設けられた天山北路、天山山脈北麓のジュンガル盆地にあるジムサル県にあった。見渡す限りの紅花耕作地はその規模にして、山形の何十倍であろうか？連作障害を防ぐために隔年でひまわり畑と交代栽培するという。しかし、これ等は何れも採油用の農地であり、一部は薬用となる。不思議なことに今も昔も染色に利用する話は一切聞かれなかった。これは、風土的にも厳しい環境にあって遊牧騎馬民族の非定住的生活様式からくるものでしょうか？古代から染色を主力としたのは旧名、蜀と呼ばれた四川省の方だった。

V. 伏羲女媧神像に施された二通りの化粧法が意味するものは？

紅花染めの価値ばかりに捉われていた私は実のところ、遙々この地に赴いてジュンガル盆地に広大な紅花畑を眼にしても、染色に関しての成果が全く得られず、おおいに落胆していたが、二番手の訪問地、トルファンで思いがけない手がかりを得ることになった。それが「風土変われば、モノも変わる」という教訓になったのである。

紅花色素の利用方法には二通りあり、それが草木染めの植物性染料であり、他方が「京紅」に利用される植物性顔料の面だった。これは、大量の紅の色素（Carthamin）を幾重にも繰り返し抽出した最終のエキスの塊で、工程は途中まで同じでも性質は別物である。

ジムサル調査を終えて、匈奴が最大拠点の一つとしていたトルファンのアスターナ古墳^{注4)}を訪れた際、当古墳の入り口に設置されていた大きな伏羲女媧像^{注5)}をみて、不思議であったが、恐らく当時代において漢民族、西域民族共通のトーテムであることが示唆された。（全出土品展示物中、当モチーフが最多の出現率で眼に付く）

ここでのポイントは、同じ伏羲女媧像でも、化粧法が二通りあったことに気付く。

唐風化粧法 は頬紅を顔全体に塗り、ボカシが入る。（図3参照）

西域風點丹化粧法 は、くっきりとした5円玉サイズ目の丸型であった。（図4-8）

この古墳の地下に横たわる2000基中、発掘された500基余りの墓室から多くの副葬品が出土し、それらの殆どは新疆ウイグル自治区博物館に収蔵されており、特に目を引いたのが、様々な表現による伏羲女媧神の紙本画又は絹本画であった。このうち女媧神像画の半数が目の丸型頬紅（點丹）をつけており、埋葬副葬品であった多くの“騎乗女性泥俑”や“仕女泥俑”なども同じ化粧法が施されていた。これらは本家、唐代化粧法の“ボカシ型”とは異なるので漢民族の高昌国一族^{注6)}も圧倒的多数派の騎馬民族型流儀を踏襲したのだろうか？



図3 唐風化粧法
参考資料18より



図4



図5



上図6・下図7



図8 仕女達の部分拡大図

図4 重文：樹下美人図（MOA美術館所収蔵）図5 伏羲女媧神図（（新疆自治区国立博物館所蔵）

図6：（図5）の部分拡大図 図7：（図4）の拡大（頬全体に紅を延ばす唐の化粧法）

図8：（新疆自治区国立博物館所蔵、アスターナ古墳出土品部分）

VI. 紅花渡来 北回りルート of 痕跡は存在した

本稿のテーマはあまりにもマイナー過ぎるのか、それに関する文献は皆無で行き詰まった最中、偶然にもそれに繋がる四つの糸口が次々と身近に起ってきた。先ず一つ目が道北の豊富遺跡（擦文文化）から紅花の炭化種子が発見された事実。二つ目は常識的には考えられなかった旧満州地方に紅花生産地が現存したこと。三つ目は山形県、著名古代布コレクター秘蔵品、“山丹服（蝦夷錦）”^{注6)}との出逢い。そして四つ目が現代韓国の伝統的花嫁化粧法と仮面劇タルチウムの女性仮面において、アスターナ古墳でみた化粧法と同類のものが現存したことである。これら諸現象には隠れた北方ルートの存在が示唆されるものであり、2000年にも前に匈奴が滅亡した後も彼らの文化が思わぬところで継承されていることに繋がってきた。従って、本研究の視点も大幅な方向転換が迫られる。以下、それら偶然ともいえる4件の出逢いを追って推論してみたい。

1. 道北地方の豊富遺跡（擦文文化）^{注7)}から紅花の種が発見される

本研究開始以前、1977年に山形新聞社の特別プロジェクトで、同じく「紅花のルーツを探る」と題する探検調査があり、当時隊長であった渡部俊三氏（山形大学名誉教授）から色々ご教示を受けるうち、驚くべきニュースを聞かされた。それは切りぬかれた新聞記事の内容であった。その概略とは、図9, 10に示すように両者は明らかにソバが3稜型、ペニバナは4稜型の外皮で蔽われていて、素人でも判別できる。



図9 左図は紅花の種子外形。底部から見ると四角形で4稜形の外皮で蔽われている。
図10 右図は複数のソバの種子外形。3稜形の外皮が特徴であった。

—クロフォード教授（米）^{注8)}は、市立旭川郷土博物館所蔵のソバの炭化種子（豊富遺跡から出土1976年）の中に、混入していた紅花の炭化種子を発見したという。その種子は豊富遺跡が推定で1,000年以上前^{注9)}のものであり、日本で発見された最初の埋蔵紅花種子であった—

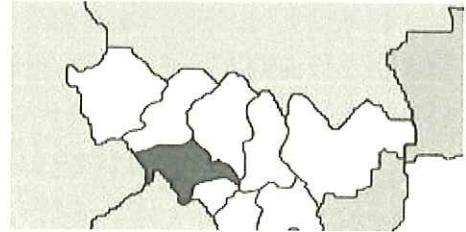
また、付け加えられた渡部氏の感想がそれ以上に私を奮い立たせた。曰く、「こんなに凄い大ニュースなのに山形では全く話題にも上らなかった。何故なのかねー」とそれには私も全く同感で、これが北方ルートから入ってきた有力な証拠になると閃く。本来、この研究を担当した当時の北大チームは韃靼そばの分析が主眼であったから、紅花の種子が若干混入していたくらいでは夾雑物程度の認識だったのかもしれない。この豊富遺跡は擦文期（8～13世紀）のものとされ、北海道の場合は本土からはかなり遅れてはじまっており、照合すると日本では奈良時代初頭から鎌倉時代末期に当たる。また、この頃から、アイヌ文化は網走にあるモヨロ遺跡に代表されるオホーツク文化が入ってきて、最盛期に入ったとされている。モヨロ人は顔立ちが平坦でアムール川流域の人々や後のサハリン・アイヌの人々に顔つきが似ているといわれる。

2. 東北三省に存在した紅花生産地

上記項目について、早速、アイヌとの交流があったとする現東北三省の中で紅花が

育つ環境条件があり得るのか？またあるとすれば、何処なのかについて調べた結果、あの広大な土地に無数にある地名から唯一、紅花生産している場所を探し当てた。

それは吉林省長春駅から五つ目の駅にある四平市(図 11)であった。当市のホームページによると、地理的には中華人民共和国に接する三省中、最西南部に位置する吉林省地級市。各方面に連絡する道路・鉄道網により中国東北部の交通の要衝で「東方のマドリッド」とも称される新興工業都市。ちなみに清代は女真族の西太后出身地とあった。さて、肝心の紅花栽培の適、不適合は気象条件による。山形の場合、紅花の種まきは4月上旬～中旬で7月初旬に開花する。



地中の温度が-2～-5℃の間でなければならない。四平市の気象は表 1 のごとくになっており、温帯、半湿潤モンスーン気候で、紅花生

表 1 四平市の過去月間天気・気候情報と紅花栽培の可能期間(網掛部分)

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均最高気温(℃)	-8	-3	5	15	22	27	28	27	23	15	3	-5
平均最低気温(℃)	-19	-15	-7	2	10	16	19	18	10	2	-7	-15
降水量(mm)	5.5	5.3	13.3	30.5	53	97.7	174	144	56.6	31	13.8	6.6
日の出	07:1	06:4	05:5	05:0	04:2	04:0	04:2	04:4	05:2	05:5	06:3	07:1
日の入	16:3	17:1	17:4	18:2	18:6	19:2	19:2	18:4	17:5	17:1	16:2	16:0

育には良好な環境条件が整っているようである。農作物には紅花、円参、サンザシ、ハシバミ、カイドウ等があり、特にトウモロコシとヒマワリは生産量と輸出量ともに全国第一位を占める。この中国全土で一位という点ですぐに、繋がったのが、ウイグル自治区の広大なヒマワリ畑の光景である。彼地は紅花畑と組んで、一年置きに輪作交代するシステムであった。此处は、おそらく、ジュンガル盆地と似た気象条件があるようだ。これによって、東北三省域の他所でも条件を整えば韃靼ソバとともに古くから栽培できた可能性もある。

3. 糸口となった蝦夷錦(山丹服)から知る山丹交易の存在

本研究は誠に底なし沼であり、月日を重ねる毎に無限の世界が広がる一方で、早く休止符を打ちたいと願っていた矢先、偶然にも、元当学会会員であった徳永幾久先生(米沢女子短期大学名誉教授)のお供で著名な古布某コレクターを訪問したとき、初めて蝦夷錦を拝見する機会があった。その時の衝撃は筆舌尽し難いものがある。これぞ、カルチャーショックというべきものなのか、そこから受けた感覚は、これまで観てきた古今東西の如何なる衣服文化の装飾や総刺繍仕上げの絢爛さとは全く次元を異にするもので、それが私にとって初めての「山丹服」(図 12)との出逢いであった。丁



図 12 山丹服（蝦夷錦）
北海道デジタル図巻より

度、その頃、ステップロードが「絹馬交易」＝「貂皮交易」として盛んに利用されたことを学んでいた折であった。ヨーロッパの黒貂毛皮ブームは、狩猟騎馬民族たちはこの好機を見逃がす筈がなく、シベリアの針葉樹地帯に住む少数民族を使って交易の仲介役を担当した。やがて、乱獲によって黒貂はステップロードと並行するタイガの針葉樹林帯からは絶滅種となり、次の狩猟場は旧満州地帯へと移り、さらに枯渇してくると、北海道が狙われたと聞く。この利権争いはロシア、中国、日本が関わり、日清戦争、

日口戦争等の端緒となった。この事実を知ったばかりの頃だったから、それが北方ルート説へ拍車をかけた。我が国へ入ってきた時期は清王朝（1636）が始まって以来のことである。しかし、日本では北方の毛皮を貢納した最古の記述がある。

※出羽国における摂関家領大曾祢庄の年貢として、水豹（アザラシ）5枚を京進すべきこと
左大臣藤原頼長（1149年）に対して、藤原基衡が申し出ている。

※1423年、安藤陸奥守が、室町幕府の将軍に就任した足利義量に祝儀としてラッコ30枚を贈り、将軍家が礼状を与えた礼状の控えが幕府側に書き留められている。

これをみる限り、山形では藤原頼長公への年貢として米の代わりにアザラシの毛皮を差出しており、この時代はすでに、大陸文化の影響を受けていたことが考えられる。また、それより古い記録「日本書紀」にはすでに「斉明天皇4年（658年）の時代、「是歳、越國守阿倍引田臣比羅夫討肅慎、獻生罽二・罽皮七十枚」のくだりがあるが、この意味は当時の沿海州付近に住む肅慎人が阿倍比羅夫に熊の毛皮を貢納した際の場面で功を奏さず、殺されたのであるが、要は当時から毛皮は北方の貴重な交易物資としての習慣があったかに見てとれる。

Ⅷ. 東北アジアではどのような民族が伝統的紅花文化を継承しているのか？

さて、残る謎3については、史記匈奴列伝ではBC174年、漢軍に完敗した匈奴の最高司令官、冒頓単于は北漠に逃亡したとされ、その後の動勢は4世紀までは謎に包まれたままであった。しかし、匈奴の勢力圏は驚くべき範囲だった。図13のごとく、北はバイカル湖周辺まで、東は大興安嶺を越えた東方の沿海州（旧女真国）の黒竜江河口まで包括している。彼ら北方異民族には北狄群に：鮮卑・突厥（とつてつ）・契丹（きつたん）・靺鞨（まつかつ）・回紇（ウイグル）等で、東夷群には濊、貊、倭，韓が属していた。従って、逃亡したのは首領クラスの水山の一角に過ぎないことが分かる。その匈奴の残党はやがて、二派に分かれ、西域に拠った群が4世紀頃フン族と化したらしいことはよく知られているが、本来、



図 13 匈奴の勢力範囲

騎馬民族だった北方の種族は半農半牧で生計を立てたのだろうか？現東北三省地域（旧満州）は歴史的に実に多民族の抗争があり、敗者は常に歴史の下に潜っている。

4. 現代韓国に継承されていた西域の化粧法

古代北方には韃靼、鮮卑、契丹、勿吉、女真族が、更に沿海州に当たる東夷には肅慎（しゅくしん）、穢貉（わいぱく）等の部族が群雄割拠していたが、漢民族はこの極寒地域には無関心だった。ここで推論であるが、前掲の匈奴が壊滅したあと、これ等北狄に当たる残存部族の多くは故地に残っているとすれば、彼ら女性群の立場からみれば、斯くも魅力的な紅花化粧料であれば種族を超えて栽培すると思う。であれば万里の長城外に仕切られた東北三省でも栽培可能な地理条件があるか否かが鍵である。

図 12, 13 は今なお生き続けている実例を紹介する。

これも、同じく本プロジェクト期間中に韓国、済州島へ訪れる機会があった。その際、唾然としたことがあった。立ち寄った済州島民俗自然史博物館で、伝統的結婚式の展示場面で眼にした花嫁の化粧法がアスターナ古墳でみた、点丹化粧そのものだったからである。これは中国本土でも継承されていないものが、此処に存在した。加えて、別な機会に韓国安東市では伝統的仮面劇（タルチュム）が行われおり、早速現場を訪れると、若い女性面の多くに同じ点丹化粧（ヨンジ・コンジ）が施されており、この化粧法の由来について学芸員にも尋ねたが、昔からそうあるとしか答えがなく、ただ、「インドの影響ではないか」と付け加えた。確かにインドにはヒンズー教



図 14 韓国伝統花嫁化粧



図 15 韓国仮面劇の女面



図 16 a. ロシア入れ子型人形マトリョーシュカ

b. ブルガリア人形

c. フィンランド人



図 17 d. 青森県土人形

e. 青森県土人形

f. ポーランド人形

g. ハンガリー人形

- 1) 通説では弥生人による大和朝廷の下で編纂された記紀を中心とする歴史観が現在に至るまで全国民の常識になっており、日本国の半分=東日本には一万年以上の昔から存在した、我が国先住民による地方分権的連合国家としての歴史が抹殺されてきた。
- 2) この壁画制作年代は7c-8c初期で、分析の結果、顔などに使われた顔料は漆喰壁の上に鉛白が塗られ、唇と帯や裳の赤い縞縞部分にはいずれも朱(HgS)と判明。しかし、その後、1988年に発掘された奈良県斑鳩町にある藤ノ木古墳(六世紀後半)の石棺内から検出された大量の紅花の花粉が発見されても、この時はそれによる染色の痕跡はないとされた。
- 3) 騎馬遊牧民の始まりは、紀元前6~同4世紀に活躍したスキタイであった。スキタイ文化は動物模様と黄金の使用がその特徴だが、これが南ロシア・モスコル・

注

しかし、当分は紆余曲折の道を覚悟しながら前進したい。

は伝承文化についても、いつの日か私の色彩学専門分野へと繋がることを夢見ながら、現段階では断片的ではあるが、東北に深く沈黙している様々な小さな歴史、事象又提起の内容であることをお断りしておきたい。

ニツチの研究を手探りで、ほんの緒に就いたばかりである。従って、今は拡散型問題た文化との間に深い繋がりがあることが分かってきた。それ故、改めてお粗末ながら後に気付いた様々な謎が、実は東北アジアの歴史文化が、とりわけ、東日本に埋もれた本研究は定年前のプロジェクトとしていつたん終了した形にはなっているが、定年足、体力不足で調査が深まらず、残念ながら次への課題として残すことになった。

しかし、それに関しては私なりに仮説をもっているが、現段階では知識不足と資料不、一トで紅花の種子を運んだ人は誰か？”について展開すべきであった。

おわりに

ここで、このページに移る前に本来ならば“まとめ”として章立てをし、“北方ル

御意見、御叱責を賜りたく思う。

論、現段階ではあくまで仮説である。このような大胆な飛躍的見解について諸先輩の御意見、御叱責を賜りたく思う。

た証として東欧圏、東北アジア諸国に残る伝統的民族人形や、現代に引き継がれてい

から収集された土人形展示館には青森県の一県のみにか見当たらず、おしなべて、

の『第三の眼』とする意味、又は魔除けとして額に“ビゼイ”と呼ばれる付けホク

ターナ古墳で閃いたことがあった。4世紀に西域に残った匈奴がソシ族と化し、侵略し

た東欧圏諸国の伝統民族人形には、もしかすると、痕跡があるかもしれないとネット

で根気よく調べたところ、図16-17のごとく、軒並みこの点丹型類紅化粧を施してい

ることに気付いた。人形たちの同化粧法は見るからに可愛いらしい。この起源は恐ら

く昔はよく見かけた寒冷地の子供の赤い頬oppaを連想させる。此処に挙げた幾つか

のサンプルは自写したものを含め、収集画像のほんの一例である。わが国でも全国区

から収集された土人形展示館には青森県の一県のみにか見当たらず、おしなべて、

これらは東北アジア民族の共通因子であろうか？

紅花をこのような形で残した匈奴は2000年前に姿を消したが、かつて彼らが存在し

る韓国の伝統化粧法並びに仮面劇には、紅花にかかわる古代西域文化との繋がり

が色濃く示唆される。ただ、はっきりしていることは古代、ソシ族と関係をもたなか

った、周辺諸国の人形たちには決して見られない現象であることも付け加えたい。勿

論、現段階ではあくまで仮説である。このような大胆な飛躍的見解について諸先輩の

シベリアに波及し、スキト=シベリア文化が形成された。

- 4) アスターナ古墳群は故高昌国城主であった麹氏一族（唐代の貴族）の墓地。
- 5) 伏羲と女媧とは人頭蛇体の男女神。古代中国の始祖神は（三皇=伏羲、女媧、神農）とされている。現少数民族、苗族の伝承では、伏羲と女媧は兄妹だったが、彼らの父が雷帝（九天応元雷声普化天と戦った際、雷帝が黄河に洪水を起し、人類は兄妹を残して全滅。やがて彼らは夫婦となり人類の祖になったといわれる。
- 6) 山丹服（蝦夷錦）：黒竜江下流域に住む山丹人—アイヌ（大陸側、樺太、北海道）—松前藩の間で取引がなされる、山丹交易（所謂、朝貢交易）でアイヌが差出す黒貂等高級毛皮と引換に得られた清朝の華麗な刺繍が施された官服を意味する。それらは北前船で江戸や大坂に運ばれ、なかでも特に珍重されたのが「山丹服（蝦夷錦）」とされ、管轄した松前藩主から幕府將軍への献上もあった。その背景には封建時代のヨーロッパでは、高級な毛皮は宝石などと同様、財宝として取り扱われた。ヘンリー8世（1509年-1547英）は皇族以外の黒毛皮の着用を禁じた。特に黒テンの毛皮は子爵以上の身分階級のみ着用を許された事情がある。
- 7) 擦文文化：北海道における続縄文文化に続く文化。擦文土器・鉄器を使い、竪穴住居に住み、狩猟・漁労・雑穀栽培を行なった8～13世紀の文化。
- 8) 1,984年、北海道大学埋蔵文化調査室発行の「北方圏」52巻に掲載されたカナダ・トロント大学のクロフォード教授寄稿「先史北海道のペニバナの発見」より

参考文献

1. リヒト、ホーフエン 著海老原正雄 訳『支那旅行日記』上巻、慶應書房、1943
2. スヴェン・ヘディン著 鈴木啓造訳『さまよえる湖』、中央公論新社、2001。
3. オーレル・スタイン著 山口静一・五代徹訳『砂に埋もれたホータンの廢墟』白水社 1999
4. オーレル・スタイン著 松田壽男抄訳『コータンの廢墟』新版 中公文庫、2002
5. カルビニ、ルブルク著 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社 1979
6. 吉村 昭著 『間宮林蔵』新装版（講談社文庫）1987
7. 杉山 正明 著『遊牧民から見た世界史』増補版、日経ビジネス人文庫 2011
8. 江上波夫『騎馬民族国家』—日本古代史へのアプローチ— 中公文庫 1984
9. 佐々木史郎著『北方からの交易民—絹と毛皮とサンタン人—』NHK ブックス 1996
10. 間宮林蔵述 村上貞助編『東鞆地方紀行他』東洋文庫 484 平凡社』1977
11. 北海道開拓記念館編『山丹交易・蝦夷錦. をもたらした北方交易の道』北海道職員互助会、1995.
12. アイヌの歴史と文化より 第2章 アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導実践例
13. 五十嵐聡美著『アイヌ絵巻探訪』—歴史ドラマの謎を解く—北海道新聞社
14. 斎藤 忠『古代朝鮮文化と日本』東京大学出版社 1981
15. クロフォード教授寄稿「先史北海道のペニバナの発見」北方圏 52 巻北海道大学埋蔵文化調査室 1984
16. 松谷暁子「豊富町豊富遺跡出土種子の灰像について」『市立旭川郷土博物館研究報告』16:1986
17. 李理著『白山黒水満州風』満州民族研究史物叢刊 67 国立歴史博物館 2011
18. 李肖泳著 中国西域『民族服飾研究』新疆人民出版社 1995
19. 松崎寿和編『黄河シルクロードの考古学』雄山閣出版
20. 松田寿男 『砂漠の文化』中央アジアと東西交渉 中公新書 121, 1966
21. 宇治谷 孟（翻訳）『日本書紀』（上、下巻）全現代語訳 講談社学術文庫 1988
22. 宮本 常一『日本文化の形成』（上）ちくま学芸文庫 1994
23. 森 豊著『樹下美人』シルク・ロード幻想 小峰書店 1967
25. 張允植著『古代シルクロードと朝鮮』雄山閣 2004
26. 国立歴史民族博物館編『よそおいの民俗誌』化粧・着物・死装束 慶友社

参考写真出典元

- 図 13 匈奴の勢力範囲 杉山正明 『遊牧民から見た世界史』日経ビジネス人文庫 2003 より
- 図 16-a <http://matryoshka7.jugem.jp/?cid=1> より引用
- 図 16-b <http://www.freefreelife.com/SHOP/104536/119140/list.html> より引用
- 図 16-c <http://derlieb.exblog.jp/15018402/> より引用
- 図 17-d 著者撮影
- 図 17-e 著者撮影
- 図 17-f slovakian traditional folk doll google より引用
- 図 17-g <http://www.japan-toy-museum.org/kiroku-gakugeisitu3.html> より引用
- 図 14 韓国伝統花嫁化粧 済州島民俗博物館にて著者撮影
- 図 15 韓国仮面劇の女面 安東市野外仮面劇にて著者撮影

A Perspective on the north route hidden in Safflower introduction common belief

HIHARA Motoko,
Institute of Asian Ethno-Form and Culture

Originally, the subject of this paper, was the main purpose is to trace the roots of safflower was brought over to Japan, but since we started this study, among about 10 years has elapsed, we are investigating the various surrounding circumstances within, even the expertise and common sense historic we have received, there is the omission of many, is simplistic interpretation and verification, so far, have come to be faced the mystery of bottomless contrary. Is regarded as unlawful official route other than the Yamato Court established later, was observed in the regime, local powerful family population in the Northeast region can participate almost positioned Ezo, and Ezo, also for trade and circumstances to Asia diplomacy of their own especially in the ancient writings no, not even understand the situation. Note 1)

Therefore, the stop point of view, by whom its value is found — safflower, by whom it is carried, by whom do you inherited? — was to be taken up for, but this paper is not a validation for the historical fact that safflower itself of the desert, to full Korean Peninsula - Japan reached or Egypt-China've been through the Silk Road.

History book of the Certified is a recording by the winner of the times, there is absurd that has been treated as the presence of low-dimensional if it were apocryphal book it always the loser. Another route sank below the surface of the water, so to speak, when we turn our attention to the back road to the table road, a new landscape has been deployed in me, but there is such signpost mystery full of back roads as a matter of course It is true intention should also be said that, without, it was also lost road turn back. Therefore, some scenes that you experience in the course of trial and error to walk ties, I went to the northern route cord quest related to safflower brought over here.

最上川舟運の安全祈願と文化

東北文教大学短期大学部 菊地和博

はじめに

山形県を流れる最上川を活用した舟運は、江戸時代から明治時代にかけて、日本海海運と一体化されて米や特産物などの物資を上方や北陸地方へ運ぶ大動脈の役割を果たした。この物資輸送は川・海ともに破船や座礁など大変な危険を伴うものであり、船頭や商人など舟運に関係する人々は神仏への安全祈願を怠らなかつた。この祈りの心の表れとして最上川流域を中心に多くの石造物建立や神社仏閣への奉納物を見出すことができる。本稿は、これらの祈りの表現物を貴重な文化遺産と捉えて、そこから後世に生きる私たちは何を学ぶべきかを述べたものである。

1. 最上川舟運と日本海海運の一体化

最上川舟運は、中世までは清水付近（現大蔵村清水）の上流部まで、近世からは基点・隼・三ヶ瀬の三難所の開削による中流部まで、そして黒滝（現白鷹町）・五百川峡谷（現朝日町）の開削による上流部まで、およそ100年以上かけて段階的に開発されている。最終的に最上川舟運が糠野目（現高畠町）から酒田湊（現酒田市）まで物資輸送ルートとして完成したのは元禄7年（1694）のことである（菊地和博『やまがたと最上川文化』）。

寛文11年（1671）・12年、河村瑞賢によって太平洋側の東回り航路と日本海側の西回り航路が整備された。この航路開発は、天領の御城米を船で江戸へ安全輸送して、食糧の安定供給をはたすためであり、国家経済の大計を無窮に開いたものである（新井白石『奥羽海運記』）。

西廻り航路である日本海海運が発達すると、酒田湊を起点とする最上川舟運と一体となった遠距離流通経済ルートが確立された。京都・奈良・大坂などの上方の物資は、北前船に荷積みされて日本海を北上して酒田湊に到着した。物資はさらに川船に積み替えられて最上川を遡り、内陸地方の河岸に下ろされた。主として上方からの物資として、天保3年「庄内藩覚書」には播磨塩、大坂・堺・伊勢の木綿、出雲の鉄、美濃の茶などが記されている。このほかにも宇治茶、近江蚊帳、古手、繰綿などがあつた。

これとは逆に、最上川を下る川船に積み込まれた米や出羽の特産物は、酒田湊を経て日本海を南下して上方に運ばれた。紅花、青苧、真綿、蠟、漆、胡麻、葉煙草などが代表的物資であつた。最上川舟運で特徴的なことは、商人や地主などの民間レベルでの活発な交易活動が行われたことである。これは岩手県や宮城県を流れる大河北上川などにはみられなかつた最上川固有の側面である。このため多彩な文物の交流や、それにとまなう地域文化への触発がなされたのであつた。

2. 舟運・海運の安全祈願

最上川は難所のじつに多い河川である。流れは表面上緩やかに見えるが、じつは内部は急な流れを伴っている。また、渇水期になると岩盤が至る所に露出し、船の通る道としてはまさに狭隘な航路だったといえる。したがって船の破損や転覆も多く、「板子一枚下は地獄」とわれたように厳しい舟運事情が横たわっていたのである。出羽国特産品である紅花・青苧は安全輸送策が試みられ、先に記した三難所を避けて大石田河岸まで陸送していたことは、そのことを雄弁に物語る。以下に記す『おおいしだものがたり 第102話 最上川舟運のはなし』（小山義男）は江戸時代後期の三難所の厳しい状況を示している。

寛政9年（1797）「一番積み船、幕府領・大名領米積船142艘、隼の瀬無事通過」したことを富並村庄屋寺崎永蔵が新庄領横山代官の安嶋涛右衛門に報告しています（『北村山郡史』上巻）。三難所を無事通過するたびごとに、毎回代官所に報告することが義務付けられていました。特に幕府の廻米（かいまい）を運ぶ際、三難所の通過にはことのほか神経を尖らせていました。

以上の実態から、かつて舟運関係者による安全祈願がさかんに行われ、山形県内の最上川流域において、以下に示すような建造物・建立碑・奉納物が具体的な祈りの形として表現されてきた。

(1)神社の建立

- ① 舟玉神社（庄内町清川）
- ② 矢向神社（新庄市本合海）
- ③ 外川神社仙人堂（戸沢村古口）
- ④ 羽黒神社（村山市長島）
- ⑤ 金毘羅（金刀比羅）神社（大石田町大石田・大蔵村合海など各地）

(2)石碑・石像物の建立

- ① 「舟玉大明神」（長井市金井神・酒田市龍徳稲荷神社など）
 - ② 「金毘羅大権現」「金刀比羅宮」（寒河江市松川・寒河江市柴橋など各地）
 - ③ 「象頭山」（舟形町堀内・河北町吉田など各地）
 - ④ 石灯籠・常夜籠…台座に「海上安全」「船中安全」の文字が刻印（大石田町西光寺など）
 - ⑤ 狛犬…台座に「通船安全」が刻印（山形市鳥海月山両所宮など）
 - ⑥ 船型准てい観音像…「明德丸 石見国油屋末代吉」の文字が刻印（酒田市天正寺）
 - ⑦ 船型千手観音像（酒田市柏木山 三十三観音の一つ）
- (3) 「船絵馬」の奉納（大江町巨海院・河北町白山神社・大石田町熊野神社・酒田市などに多数存在）
- (4) 「木舟」奉納（小型の木製船の奉納が米沢市貴船神社にみられる）
- (5) 「金比羅樽流し」の習俗（山形県で唯一中山町川向地区で行われている）

なお、これらの建造物などとは異なるが、舟運安全の祈りの心として注目されるべきものがある。それは、江戸時代の享保9年（1724）記録に、山形の商人たちが村山地方に聳える葉山と出羽三山の一つである湯殿山に舟運安全のための代参をお願いしていることである（『北村山郡史』

上巻)。このことは、山々が川の安全を守ってくれるという観念が当時の人々にあったことを示すものとして留意したい。

3. 建作物や奉納物からうかがわれるもの

これまで見てきた最上川の舟運や日本海海運への安全祈願を示す建造物・建立碑・奉納物などからうかがわれることを以下に記してみる。

(1)神仏の加護への祈り・願いがじつに切実であることに驚きを禁じ得ない。

舟運関係者は、航行・航海等の一定の知識や技術は持ち合わせており、日々知恵や工夫をもって対処していたであろうことは推測できる。しかしそれはそれとして、過信や慢心を捨て去って厳しい自然に向き合う謙虚さがうかがわれ、それが最上川流域に貴重な文化財を残すことになったことと考えられる。

(2)建造物・奉納物などに上方との交流の痕跡を明確に見出すことができる。

- ① 石像物の素材(たとえば御影石など)には羽州山形産以外の遠距離から船に搬入されている。
- ② 石像物台座には大阪在住の石工名が刻印されているものがいくつか見出される。
- ③ 京都・北野天満宮や大阪・住吉神社の石灯籠などには、山形在住の数名の商人の名が刻印されている。

このことについて、以下に具体的事例をあげてみよう。

- ① 北町下槇白山神社の御影石で作られた石灯籠
- ② 山形市十日町佐藤利右衛門家の石灯籠
佐藤利兵衛・佐藤利右衛門一族が大坂住吉大社に石燈籠2基を奉納(文久2年の年号あり)。
- ③ 山形市六楯八幡神社の石灯籠一対及び狛犬
石燈籠台座に「大坂心齋橋 石工 名田屋喜兵衛」、「安政6年8月 海上安全 願主 佐藤利右衛門」と刻印。
- ④ 山形市蔵王山頂の狛犬の台座に「安政4年 大坂石工 西川弥兵衛」と刻印。
- ⑤ 山形市宮町鳥海月山両所宮の狛犬の台座に「大坂西横堀 細工人 和泉屋四郎兵衛」と刻印。
- ⑥ 中山町岡柏倉九左衛門家の石灯籠の素材は小豆島産御影石で、大阪城三の丸と同じ石燈籠と伝えられる。

4. まとめ一祈りの心から学ぶもの

(1)最上川舟運をとおして自然がいかに厳しいものであったかがよく理解できるが、舟運に関わった人々は諦めずに、それを乗り越えようとして技術と知恵をもって挑んでいった事実が大いに学ばなければならない。その一例として、岩盤を開削して船が航行できる道つまり「船道」を歴史的段階を踏みながら取り組まれていったことは賞賛に値する。

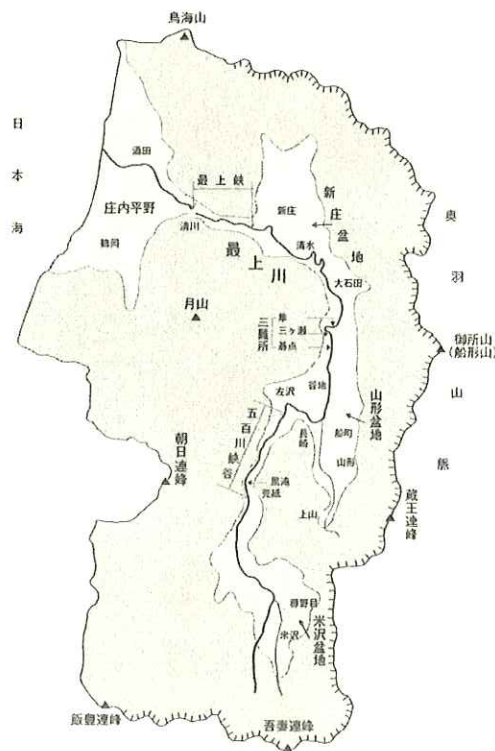
(2)自然に対する恐れや畏敬の心を持っていたことはすばらしい態度である。それは自然を侮らない謙虚な生き方であり、一方では科学技術を過信してはならないという戒めを持っていたことを現代に生きる私たちは大いに学ばなければならない。特に3.11の東日本大震災や福島第一原発事故を体験した私たちは、過去の人々の生き方に大いに学ぶ必要がある。

(3)祈りの心から生み出された文化財・文化遺産はまさに地域資源であり、それらは地域史や全国史

を学ぶ手がかりをつかむことのできる貴重な教材・テキストである。今後も過去の遺物として見過ごすのではなく、大切に保存しながら学びの素材として現在に活かす工夫を続けなくてはならない。

<参考・引用文献>

- ・新井白石「奥羽海運記」『新井白石全集』第三巻 国書刊行会 1977年復刊
- ・菊地和博『やまがたと最上川文化』東北出版企画 2013年
- ・菊地和博「川と海の交通と文化交流」『東北学への招待』角川書店 2004年
- ・菊地和博「舟運による文化交流の多面性」『季刊河川レビュー139』新公論社 2007年
- ・『北村山郡史』上巻 名著出版 1972年復刊
- ・小山義雄「最上川舟運の話 第102話 その16」『おいしいものがたり』大石田町 2003年開始



最上川と地勢



図1. 三難所 (村山市三ヶ瀬)



図2. 黒滝付近の「舟道」(白鷹町)



図3. 金刀比羅神社 (大蔵村合海)



図4. 船玉大明神 (酒田市)



図5. 金毘羅大権現 (寒河江市松川)



図6. 象頭山 (河北町吉田)



図7. 船型千手観音像（酒田市柏木山）



図8. 狛犬（山形市鳥海月山両所宮）

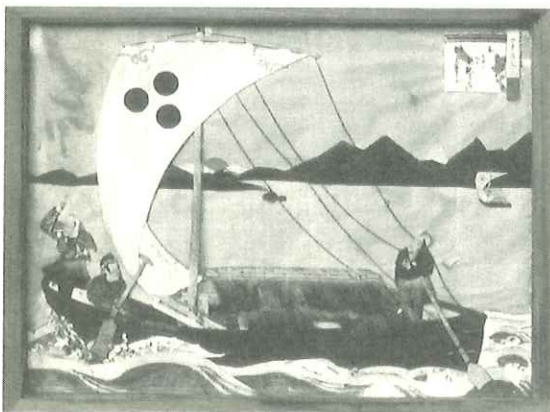


図9. 小鵜飼船絵馬（大江町巨海院）

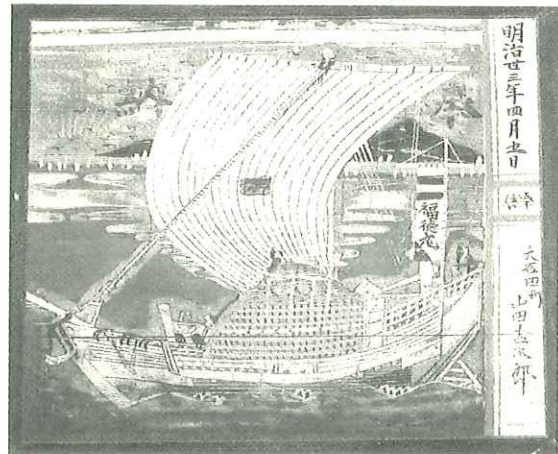


図10. 船絵馬（大石田熊野神社）

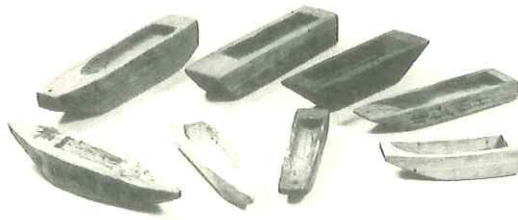


図 11. 木製船 (米沢市貴船神社)



図 12. 金比羅樽流し (中山町川向)



図 13. 大阪天満宮に奉納された石灯籠 (長明燈)。山形の豪商であった佐藤利兵衛・佐藤利右衛門・佐藤柳兵衛が元治元年 (1864) に納めたもの。

Prayers for Safety and the Culture of the Mogami Riverboats

KIKUCHI Kazuhiro Tohokubunkyo University Junior College

The boats which sailed along the Mogami River (which runs through Yamagata Prefecture) from the Edo period until the Meiji period, along with the Japan Sea transport ships, played a major role in trading. Examples of the transported products were rice and special products sent to Kyoto and the Hokuriku District. The boats faced many dangers such as shipwrecks both on the river and at sea. Therefore the boat captains and merchants whose cargoes were being transported never failed to offer prayers for safety to God and Buddha. We can see many stone statues and offerings to shrines and temples in the environs of the Mogami River. This paper will examine what we future generations can learn from those remaining cultural assets.

アジアにおける染付技法の新たな展開

—鉄顔料と銅顔料の混合による顔料を使った作品制作—

愛知県立芸術大学

兪 期天

愛知県立芸術大学

○太田公典

1. はじめに

染付は、釉薬の下に文様を描く「釉下彩」技法の一種で、白磁胎にコバルト顔料を用いて装飾し、透明釉をかけて高火度で焼成した磁器である。染付の起源は中国にある。

「中国では「青花」（「花」とは文様の意）と呼ぶが、古くは釉下に青色の文様があることから、銅呈色の「釉裏紅（ゆうりこう）」とともに、「釉裏青（ゆうりせい）」といわれることもあった。」[中澤, 1985, p. 2]「日本で用いる染付という言葉は、白い布に藍染めをするような語感がある。」[鈴木, 2000, p. 32]

青花磁器は華やかな模様が描かれ、カオリンの白い素地とコバルトの青い発色はとても美しく世界的にも高い評価を受けている。このような染付は陶磁史においてそれまでの陶磁技術より優れた技法であった。14世紀に中国の景德鎮窯で開発された染付は、中国以外では作ることが出来なかったため、西アジア、ヨーロッパにおいて羨望の的となり、その希少性と美しさのため世界各地で競ってコレクションされた。しかし現在では世界各地で生産することが出来るようになったことで華麗な歴史にみるような希少性はなくなり、以前のように特別な存在ではなくなった。

陶磁器装飾技法の展開から見るとコバルト顔料である呉須を使うことで、酸化鉄や酸化銅を使った釉下彩と比べ、その特徴である濃淡の幅が広く表現できるようになり、太いダミ筆を使って広い面積を塗り込める方法も新たに考え出されたことで、題材の選択肢が拡がり、繰り返し文様だけではなく、物語性豊かな絵画的表現、寓意を含んだ吉祥文など絵画に見られるような豊かな表現の可能性を持つことが出来るようになった。

現在では呉須の持つ表現力により、多くの題材を自由に描くことが可能となっている。しかし、釉下彩技法としての歴史は、鉄顔料、銅顔料などを使い、その後呉須の表現にたどり着いたといえる。本研究ではその歴史を釉下彩の視点で見直すことで、新たな表現を模索し、実験を行い、それを基に作品制作へ進むこととした。

以後コバルトを含む顔料を呉須、酸化鉄を含む顔料を鉄顔料、酸化銅を含む顔料を銅顔料と呼ぶことにする。

2. 顔料としての酸化コバルトについて

呉須を使用した青花磁器によって陶磁器の世界は大きく変わった。釉下彩技法は呉須による精緻な絵付けを中心としているので、呉須の考察から始めることとする。

「呉須に含まれるコバルト(Cobalt)は 1785年スウェーデンの化学者Brandtによって初

めて発見された。」[金, 2010, p. 4] コバルトは周期律表の中で第9族4列の金属元素で原子番号は27番である。

2-1. イスラムにおける呉須（コバルト）顔料

イスラムにおいて陶器の釉薬の発生は早く、ササン朝ペルシャにおけるソーダ釉、アルカリ釉を使った青釉、青緑釉と古代地中海文化ローマ・ビザンティンにおける鉛釉による緑釉、褐釉が知られている。コバルト使用については次のようなことが知られている。

「中近東では、古くからコバルトを呈色材として用いた藍釉が使われていた。しかしそれは建築装飾材としての施釉レンガであり、イラクのバビロンの町のイシュタール門は美しいコバルト・ブルーの施釉レンガで飾られていた。…中近東でコバルト彩画の陶器が出現するのは、イスラムの時代になってからであり、バグダードを首都としたアッバース朝(750～1258)の時代からであった。」[岡野, 2000, p. 38]「色鮮やかな文様で飾られた鉛釉系の白地多彩釉刻線文陶器の盤・鉢・小壺類の出現であり、鉛釉系の錫白釉でおおわれた白釉陶器の鉢・皿類、または白釉上に藍・緑釉で新鮮な文様を描いた白釉藍・緑彩陶器、…これらは従来の渋い青・緑釉陶器のみに接したものの眼には、目の覚めるようにあざやかにうつり、革新的な新感覚であったにちがいない。(下線筆者)」[三上次男, 1986, p. 129]

9世紀にイスラムにおけるペルシャ陶器が発達した理由の一つに中国陶器の影響を見ることができるが、その原因については次のようなことが言われている。

「バグダードの宮廷はしばしば奢侈の禁止と金・銀器の製造禁止、あるいは厳しい制限を命じた。官僚や富民はもとより一般市民たちも困却し、これに代わる豪華な器物を求めた。時やよし、中東世界に現れたのが、この地域ではかつて見たことがない優れた中国陶器の一群であった。」[三上次男, 1986, p. 132]

「イスラムにおける、コバルト顔料はガラスや陶磁器の着色用に使用するために、自然に産出する鉱物のままでなく顔料として作られている。それがスマルト「Smalt」またはスマルタイト「Smaltite」である。スマルトは6%内外の酸化コバルトに石英及び炭酸ナトリウムを入れて加熱し、できるガラス質の物質である。」[金, 2010, p. 5] それらは藍色のガラスである。それを細かく粉末になるまで粉碎し、顔料としてガラスや陶磁器の着色用に使用するのである。

2-2. 中国における呉須（コバルト）顔料

中国におけるコバルトを使用した陶磁器は現在唐時代(7世紀～9世紀)のものが見られるが、イスラム陶器に影響を与える青花の発生については諸説があり、近年の成果として中澤氏による劉新園氏の論考の紹介がある。

「景德鎮市陶器考古研究所の劉新園氏は、元青花生産は、元王朝が設立した将作院に属する浮梁磁局で行われたことを指摘し、青花の元時代起源説を展開している。氏は史書に、元青花は浮梁磁局において生産されたこと、そこで生産される作品の文様は、同じく将作院に属した画局で考案されたこと、また将作院には多くの西アジアの職人が作業に従事していたこと、そして将作院では西域から入った材料を大量に使用し、そこに仏像に用いる顔料としてではあるが、「回回青」(イスラム圏から入ったコバルト顔料)の記述があるこ

となどをあげ、元青花の成立とイスラム圏との関係を論じている。青花は元時代に景德鎮において、イスラム圏の影響下に創始されたとする説である。」[中澤, 1995, p. 91]

中国本土でも国産のコバルトを生産することができるようになるが、染付の初期は輸入だけに依存していた。染付が成立した元時代初期に使用したスマルトの化学組成は表 1 である。

表 1

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	CaO	K ₂ O	CoO	As ₂ O ₃	H ₂ O+CO ₂
I	70.86	0.43	0.24	-	21.41	6.49	tr.	0.57
II	66.20	8.64	1.36	-	16.31	6.75	-	0.92
III	72.12	1.80	1.40	1.90	20.04	1.95	0.08	0.46

表 2

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	CoO	NiO	灼熱減量	合計
叫珠料	18.56	15.75	13.97	28.86	5.05	0.35	17.17	90.72

明時代前期の洪武年間（1368～1398）に国産のコバルト顔料の生産が行われるようになる。その背景は「太祖洪武帝による海禁政策で朝貢貿易に限定したため、イスラム圏との交易が停止し、良質なコバルト原料の輸入がとだえ、」[中澤, 1999, p. 250] 国産のコバルト鉱の採掘を行ったと思われる。コバルト顔料以外の顔料として、洪武年間に見られる銅顔料を用いた作品も青花磁器と同じ文様を描いている。

「国産のコバルト叫珠料（きょうじゅりょう）は浙江産のコバルト鉱である。」[加藤, 1987, p. 505] その化学組成は表 2 である。

叫珠料とスマルトを比較すると、叫珠料は、酸化マンガン（MnO）、酸化鉄（Fe₂O₃）がスマルトに比べ多いことがわかる。特にマンガンはスマルトには含まれず酸化鉄の含有も多いことから実際にはくすんだ暗い紺色に発色すると考えられる。

2-3. 朝鮮における呉須（コバルト）顔料

「中国の青花磁器はすでに高麗時代末期以降に朝鮮半島に将来され、朝鮮王朝（1392～1910）の権力の象徴となり、士大夫や文人を魅了してやまなかった。…朝鮮王朝は儒教を国家の政治や倫理の理念とし、王権の権威の確立のため、主要な五つの儀礼を整えた。…儀礼の器にはもともと金属器が使われていたが、太宗七年（1407）に金属不足のために金銀の器を禁ずる王命が下り、沙器や漆器の使用が奨励されるようになる（『太宗実録』）。…朝鮮に青花が導入されることになるもっとも大きな要因は、このように、儀礼上で必要だったためと思われる。」[鄭, 2012, p. 22]

朝鮮王朝で青花が直接つくられはじめたのは、官窯の成立直後遅くとも 1450 年代の初めごろまでには青花が生産されはじめていたと考えられる。

2-4. 日本の呉須（コバルト）顔料

日本の染付の始まりは磁器の生産と同時に九州の肥前地方からであった。「九州の肥前地方で日本初の磁器生産が始まったのは江戸時代初頭、1610年のことである。現在の佐賀県有田町あたりで朝鮮の陶工が磁器の原料を発見し、磁器焼成に成功した。…日本では中国景德鎮窯の染付磁器に対する需要が強かったため、朝鮮の陶工は最初から染付磁器生産を目指して中国の磁器や中国の絵手本をもとに染付意匠を考えて作りだした。…このように磁器の生産体制が整い、国内への磁器供給も漸次増加の傾向をたどり、1640年頃には広く全国的に流通するようになる。」[大橋, 2012, p. 4]

3. 顔料としての酸化鉄

鉄は、無機材料の天然原料の中でどの原料にも混入している酸化金属である。酸化鉄がガラスや透明釉に少し含まれているときは黄色を帯び、窯の雰囲気還元の場合は青色を帯びる。表3は鉄顔料として中国で使われた赭石と日本の鬼板の化学組成である。

表 3

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	CaO	MgO	BaO	Na ₂ O	K ₂ O	灼減
赭石	39.82	9.38	38.84	0.47	0.04	0.07	0.40	0.71	1.94	0.36	2.11	0.68
鬼板	51.91	10.60	25.83	-	-	-	0.41	0.49	-	4.17		6.59

主に珪酸 (SiO₂) と酸化鉄 (Fe₂O₃) を主成分として、アルミナ (Al₂O₃) を約 10% 含む土石である。どちらも大きな差はなく、しいて言えば鬼板に珪酸 (SiO₂) が少し多く、酸化鉄 (Fe₂O₃) が少ないため鉄発色がやや薄いといえる。

3-1. 中国における鉄絵

高火度釉における鉄絵以前に仰韶文化半坡類型に属する紀元前 3500 年～4000 年頃における彩陶において酸化鉄・酸化マンガンを含む土石を使った土器の器面装飾が行われているが、高火度釉における最古の釉下彩については次のようなことが知られている。

「釉葉の下に酸化鉄を含む顔料によって描くものが釉下彩であるが、技術的に釉下に描いただけでは現在の私たちには鉄絵とは呼びにくい。そこには文様なり意味を持つ絵画的な表現があることが必要である。そう考えると三国呉以後鉄絵と呼ぶことができるのは、唐末における越窯青磁と言える。鉄絵の以後の展開については以下のようなことが言われている。宋時代に入ると磁州窯諸窯や広州窯諸窯の鉄絵が見られる。…北宋末金初には、鉄絵具を筆につけ釉下に文様を描く白地鉄絵があらわれ、大いに流行し、これは以後の磁州窯の作風を代表するものになった。…江西省吉州窯の鉄絵は、宋代釉下彩の中で最も重要なものである。その作風は多様であるが、初期の文様は磁州窯の鉄絵に類似しおよそ 12 世紀のものとされている。最盛期は 12～13 世紀、文様は細かく、全面にびっしりと描かれている。そのモチーフは元の青磁と共通するものが多く、元青花の背景として見逃せない。」[長谷部, 2007, p. 2]このような酸化鉄による釉下彩技法の展開から青花技法が発生したようである。

3-2. 高麗の鉄絵

高麗の鉄絵については吉良氏の以下の論考がある。「高麗青磁・白磁は当初、素文から出発したとおもわれ、初期青磁と考えられるものには文様装飾は見られない。…青磁・白磁とも、陰刻・陽刻（含：型押＝印花＝圧出）・象嵌・白推などの装飾技法が適用されるようになり、鉄絵技法も出現する。…鉄絵技法が確認される窯址は京畿道、忠清道、全羅道などで知られている。…高麗鉄絵に類似するものが越州窯その他の中国南部の製品の製品で知られていて関連が推定されるが、その他の中国製品とも関連をもちつつ高麗独自の展開をしたものと考えられる。」[吉良, 2007, p. 4]

このような鉄分を含む土石はコバルト顔料のように陶磁器の装飾に使用された。その後の朝鮮時代には鷄龍山窯と呼ばれる陶磁器がある。素地の上に白い化粧土を施し、その上に酸化鉄の顔料で装飾されている。

3-3. 日本の鉄絵

日本の鉄絵については井上喜久男氏が美濃における展開を論じている。「日本における下絵付け・鉄絵は、桃山期の灰志野に始まり絵志野として大きく発展したことがよく知られている。15世紀代と推定される瀬戸・美濃窯の釉下鉄彩は、瀬戸・鶯窯跡および畑ヶ平窯跡出土の灰釉象嵌七宝八陵皿、…鶯窯跡は14世紀～15世紀初めに編年される窯跡であり、これらの2例により灰釉象嵌文の発生を15世紀初めに比定することが出来る。…日本陶器において、釉下鉄彩は16世紀後半の灰志野が初源と考えられ、志野で大きく発展したが、鶯窯跡と畑ヶ平窯跡出土の灰釉鉄象嵌七宝文八陵皿は釉下彩を15世紀代まで遡らせることが確実に became。彼我の陶磁からみると、中世以前の日本に存在しない技法であり、韓国・朝鮮陶磁の白磁象嵌文に類似技法を求めることが出来る。また、鉄地技法は、高麗陶磁の青磁鉄地製品に認められる。」[井上, 2007, p. 5]

また九州における鉄絵について鈴田氏は以下のように論じている。「九州においては肥前において唐津焼の中に鉄絵が見られるが当初はそれほど多くない。筆を使った鉄絵については次のように知られている。唐津焼の始まりである岸岳系の諸窯では藁灰釉を主体とし、鉄絵の製品はほとんど見られない。岸岳城主であった波多氏は文禄2年（1593）に改易されたため岸岳系の窯場が終わり、陶器の生産は南部の伊万里・武雄地区へ移行する。この段階で鉄絵製品が急速に増え、消費遺跡においても多数の出土例が見られるようになる。岸岳系の藁灰釉から透明に近い灰釉になり、釉下には鉄絵が描かれていていわゆる絵唐津が誕生する。」[鈴田, 2007, p. 5]

このようにこの両地域における鉄絵は朝鮮半島からの影響をうかがわせることが指摘されている。

4. 顔料としての酸化銅

銅による代表的な発色は緑色、青色、赤色があり、同じ成分の銅を用いても釉薬の構成成分と焼成方法によって色調が変わる。酸化焼成の場合、釉薬の塩基性の主体がアルカリ(Na、K)の時は、エジプトの青釉のようなトルコ玉青色(Turquoise Blue)を示し、アルカリがなく鉛と珪酸だけの鉛釉になると、銅は濃い緑色を示す。

赤色の発色は5-5-4で詳しく述べるが、還元焼成による銅のコロイドによる発色である。

4-1. 中国の釉裏紅、辰砂釉

酸化銅は漢時代の緑釉と唐三彩（青、緑、黄）に見られるように緑の低火度の鉛釉として使用された。銅は高温でも発色するため陶磁器の顔料として用いられ、多様に発色することで断続的に使用され普遍的な顔料として使用されている。

1250度前後の高火度焼成では酸化銅が含まれた釉薬を酸化雰囲気中で焼成することで、釉薬中の銅が酸化第二銅(CuO)に変化し青色または緑色を表す。還元焼成では酸化第一銅(Cu₂O)または金属銅(Colloid)の状態になって赤色になる。陶磁器でこのような性質の銅を顔料で赤色に発色させるためには二つの方法がある。ひとつは釉下彩で、銅化合物を絵の具として絵を描くか、あるいは銅を含んだ釉薬を作り、還元焼成により発色させたものである。釉下彩としては、中国の元代に使用された釉裏紅が有名である。もうひとつは明清時代に見られる辰砂釉による釉彩である。

「中国で低火度の鉛釉に銅を入れて使用された銅釉は千年間持続的に使用されてきたが、唐代(AD608~916年)になると緑色または青緑色の中火度の釉薬に発展した。このような中火度の銅釉を新たに使用したのが長沙窯である。ただし、酸化雰囲気中で焼成された関係で銅顔料が赤色ではなく緑色に発色したことが大きな特徴である。」[黄, 2008, p. 7]

「長沙窯の銅顔料で制作された磁器は酸化雰囲気中で焼成しているため初めは銅の顔料が赤色に発色されなかったが、偶然に還元雰囲気中で銅顔料が赤色に発色することを知り、長沙窯の陶工らは徐々にこの技法を使用して銅画磁器を本格的に制作し始めた。長沙窯で始まった中火度の銅の釉薬は11世紀頃、中国北部地域に位置した鈞窯でも作られるようになる。鈞窯で使用された銅の顔料の彩画技法は、筆で銅の顔料を素地に広く塗る方法や銅の顔料を釉薬に混ぜて施釉し発色させる方法であった。釉薬の色はやや青色や紫色を帯びており、ほとんどは中国北地域で流行した器形や文様を中心としていた。」[黄, 2008, p. 7~8]

4-2. 朝鮮の釉裏紅、辰砂釉

「朝鮮において銅を使用して赤色の発色を得たのは高麗時代である。辰砂釉は酸化銅を還元することで得られることから、赤色の発色とともに還元焼成技術も高麗時代に発達した。一般的に銅の顔料は高火度でほとんど揮発するため、比較的低い温度で焼成される陶器類のみに使用された。このような特性を持った顔料を青磁に使用して高火度で赤色に発色させたのは高麗時代の作品が最初であり、その時期はおよそ12世紀である。」[黄, 2008, p. 1]

4-3. 日本の釉裏紅、辰砂釉

釉下彩技法の顔料として「釉裏紅は1620年代ころの小溝上窯や山辺田7号窯などの出土陶片にすでにみられ、17世紀前半の猿川窯や広瀬窯などにもみられる。1700年前後には単発的に伝世品に釉裏紅を見いだすことができる。」[鈴田, 1998, p. 278]

他には、「銅の発色による辰砂釉が 1700 年（文久 2 年）に年木庵の紫薬として深海平左衛門による記録を見ることが出来る。」[中島浩氣, 1936, p. 536] このように日本では磁器創始期から銅の使用を行ったと考えられる。しかし有田では上絵付である赤絵が行われたためか、不安定で焼成にも細心の注意が必要な技法である釉裏紅の使用は広がりを見せなかった。

4-4. 釉下彩のまとめ

歴史的に見れば釉下彩技法は鉄絵から始まり釉裏紅、呉須と展開してきた。釉下彩技法は呉須を使うようになって初めて墨の濃淡と同じような描画技法を使えるようになった。これ以後質の高い絵画性豊かな染付が中国、朝鮮、日本で作られるが、歴史の中でも酸化鉄、酸化銅の混合を意識して使った例を見ることが出来ない。理由は定かではないが現在でも不安定な釉裏紅の赤発色は当時使用しにくいということがあったように思う。しかし過去の焼成と比べれば、現在のガス窯は温度、還元雰囲気などを自在に管理することが可能である。そういう意味で見れば混合顔料の研究は今の時代だからこそできる複雑な技法といえる。以後はその技法を、具体的に示してゆくことにする。

5. 釉下彩技法による作品制作

実験と試作実技は兪期天が担当した。呉須、銅顔料を使用した作品の例として「青花辰砂蓮文壺」（図 1）に以前から注目していた。この壺は 18 世紀後半朝鮮王朝時代に朝鮮で作られ銅顔料が紅く発色した蓮の花と呉須を使った青い葉のバランスが美しい作品である。この作品では、それぞれの顔料である呉須、銅顔料は単独で使用されている。この紅い花の色に、多くの色彩の幅を与えることが、混合顔料を使用することで可能であると考えた。そこで蓮を題材として、「釉下混合彩蓮文大皿」（図 6）を制作することとした。



図 1 青花辰砂蓮文壺

5-1. 銅と鉄の混合顔料の実験

釉下彩技法に使われる銅顔料と鉄顔料の混合による発色の変化を試すこととした。

「やきものをつくる釉薬応用ノート」津坂和秀著の中から p.26 にある釉裏紅の調合に注目したが、一号石灰釉（日本陶料製）の調合に近いので、一号石灰釉に酸化銅と酸化鉄を混ぜることで実験を行った。酸化鉄の弁柄と酸化鉄を含む鬼板、酸化銅、炭酸銅の比率を変えて実験した結果、酸化鉄の弁柄 25%、酸化鉄を含む鬼板 25%、酸化銅 40%、一号石灰釉 10% の顔料を基本の顔料とした。

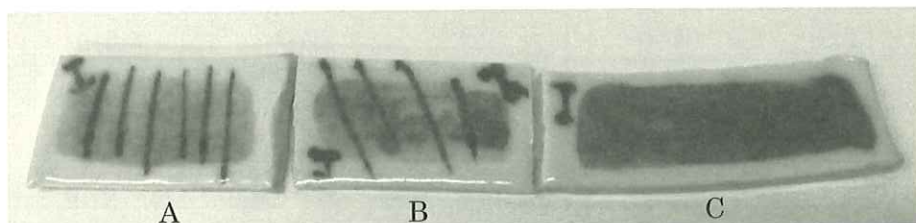


図 2 銅と鉄の混合の実験

弁柄は桜太陽印（伊勢久株式会社）、鬼板は「鬼板土」（伊勢久株式会社）、酸化銅は「酸化銅粉末（C級酸化銅）」（伊勢久株式会社）を使用した。

混合顔料はAからCの順に加える水の量を減らすことによって混合顔料の濃度を濃くし、だみ筆(注1)を使用して塗った。濃度が薄いAは酸化銅の発色があまり見えず、ほぼ酸化鉄の発色になった。濃度が濃いCもほぼ酸化鉄の発色だが、Aとは異なり部分的に酸化銅の赤色が発色した。中間の濃度であるBは酸化鉄の色も酸化銅の色も発色した。Bは他のテストピースに比べ安定した発色であったため、B濃度の混合顔料を使用することにした。（図2）

5-2. 素地について

顔料の発色を研究するため作品の素地は鉄分の含量が少ない白い磁器素地（丸石窯業原料特級磁器土）を使用。素地の原料は以下の化学分析値である。

表4

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O
丸石特級磁土	69.56%	0.26%	0.49%	0.14%	0.39%	0.12%	1.38%	3.10%

5-3. 釉下彩描画の手順

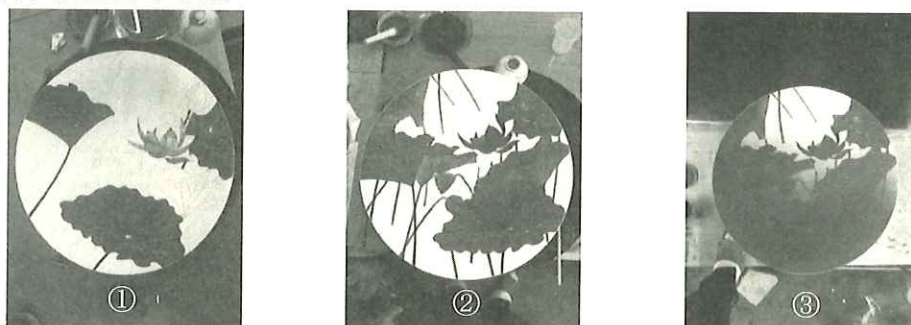


図3

- ① 地に下描きをし、面想筆を用いて骨描きの後、だみを行った。青い部分に呉須、赤い部分に銅顔料と鉄顔料の混合顔料を用いた。
- ② 引き続き描き進め、絵付けを完成させた。蓮の花と蕾には銅顔料のみを用いた。
- ③ コンプレッサーを用いて素地に呉須を吹き付けた。

5-4. 釉薬について

釉薬は今まで制作に使用した透明釉で、一号石灰釉（日本陶料製）100 に対して柞灰 7 を加えたものである。一号石灰釉と柞灰の分析値は以下である。

表5

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Ig. Loss
一号石灰釉	68.5%	10.15%	9.03%	0.59%	3.09%	8.59%

表6

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O
柞灰	29.09%	1.72%	0.30%	42.10%	1.09%	0.40%	1.49%

5-5. 還元焼成について

5-5-1. 設備について

「ガス炉DK0.5 m³」（「大和キルン工業」製）を使用した。還元焼成の炉内雰囲気で顔料の発色が変化するため、CO、CO₂濃度測定器を使用した。CO、CO₂濃度測定器は、「サンプリングユニットCEP-301」 島津ポータルガステスタCGT（島津制作製）を使用した。燃料はブタンガスを使用した。

5-5-2. 焼成と温度の測定

窯の温度測定は二つの方法で行なった。

- ① 白金線(種別 R)の「熱電対」(名古屋自動計装[株]製)を使用。この方法は数値で温度が測定され、温度変化の記録に適している。
- ② ゼーゲルコーン(日本ゼーゲルコーン協会のJSC ゼーゲルコーン)を使用。「ゼーゲルコーンはある量の熱を受けると曲がってくるように調合したもの」[津坂,2003, p.7]である。陶磁器は窯の温度ではなく、熱によって焼き締まるので温度変化とは別に正確な焼き締まり具合を測定する必要がある。ゼーゲルコーンは番号によって曲る温度が異なるため、窯の外からゼーゲルコーンを観察することで温度を測定することが出来る。本制作の窯には8番(1250℃),9番(1280℃),10番(1300℃)の三つのゼーゲルコーンを使用し、奥から8番、9番、10番順で80度に立て、窯の上下覗き窓に二ヶ所設置した。

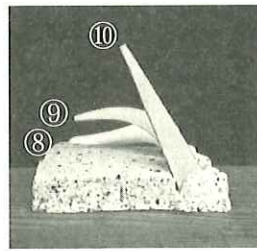


図4 上段

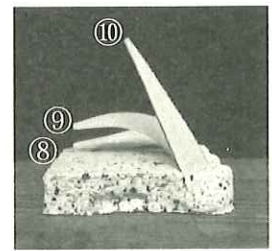


図5 下段

図3、4の今回焼成したゼーゲルコーン溶融角度をみると、ゼーゲルコーンの8番が完全に倒れ、9番が台に対し水平まで倒れ、10番は80度程倒れていた。今回の焼成は窯内温度が1250~1280℃まで上昇し、上下の温度差はほとんどなかったと考えられる。

5-5-3. 焼成時間による温度の変化と還元雰囲気

表7 焼成時間による温度の変化(グラフ)

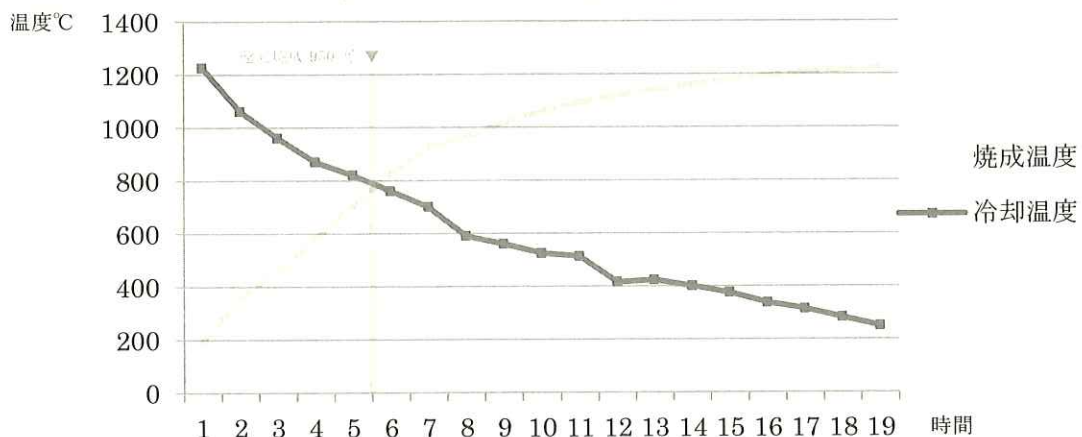


表7のグラフは焼成時間による温度の変化を記録したグラフである。温度を上げる操作はガスバーナー数、ガス圧、ダンパー(煙突の煙道を締めるレンガのこと)などがある。焼成を還元雰囲気に変えたのは7時間20分経過した、950℃の時である。最終的な焼成時間は18時間半であった。

5-5-4. 還元雰囲気と銅の変化について

還元は物質から酸素を奪うことである。窯内の温度が約950℃に到達した時、煙道を閉じ人為的に空気(酸素)の供給を遮断させ、不完全燃焼還元状態にする。完全燃焼(酸化)と不完全燃焼(還元)の化学反応式は表9のようになる。

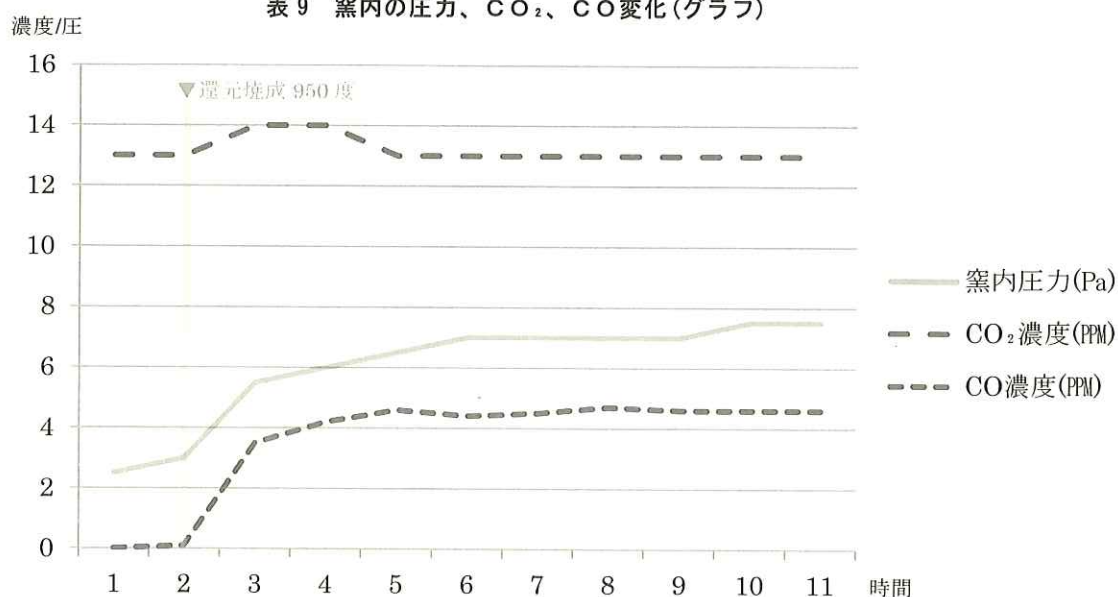
酸素の供給が十分な完全燃焼は安定した二酸化炭素(CO₂)ができる反面、酸素の供給が足りない不完全燃焼は一酸化炭素ができる。その一酸化炭素が素地や釉中の酸素(O₂)をうばうことで、焼成後の素地釉薬の色が変化する。

表8

完全燃焼 (酸化)	C 炭素	+	O ₂ 酸素	→	CO ₂ 二酸化炭素
不完全燃焼 (還元)	C 炭素	+	½O ₂ 酸素	→	CO 一酸化炭素

表9のグラフは還元焼成の直前から窯内圧、CO₂濃度、CO濃度を測定したものである。COは最高14%で全体としては13%を維持、CO₂は4~4.5%、窯内圧は最終的には8近くまで上昇した。窯が還元の雰囲気になると窯内圧とCO濃度が急激に上がる。CO₂濃度も還元の直後に上昇するが、2時間程経過すると元に戻り、それ以後は特に変化は見えない。また不完全燃焼の化学反応式が示すようにCOが生成するのが分かった。このように還元の雰囲気による酸化銅の還元反応が銅顔料を赤色系に発色させる。

表9 窯内の圧力、CO₂、CO変化(グラフ)



6. 釉下混合彩蓮文大皿（ゆうかこんごうさいはすもんおおざら）

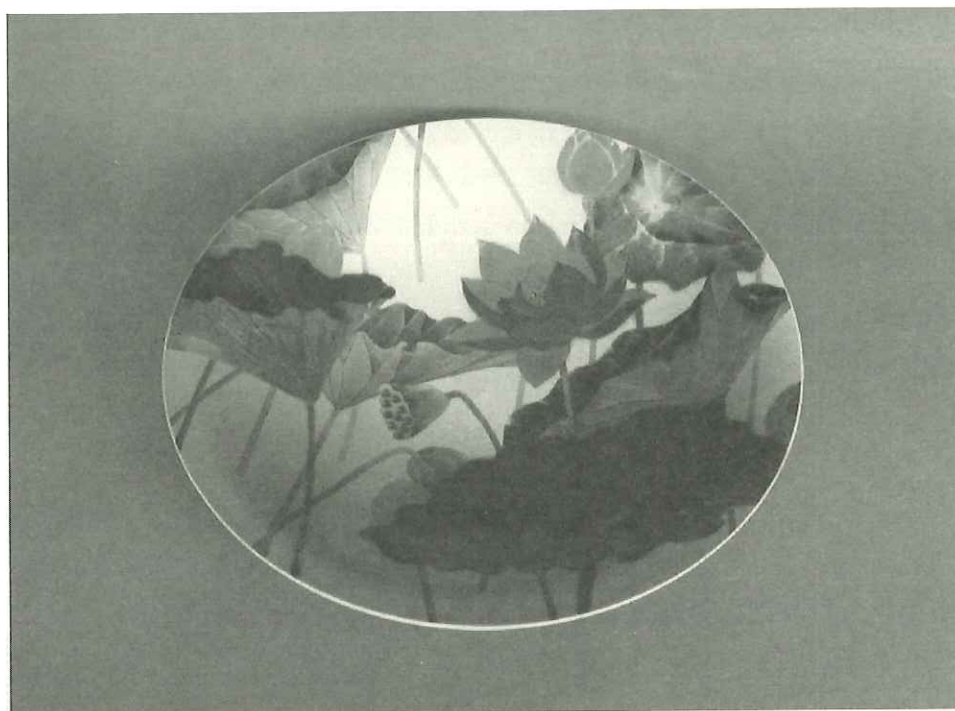


図6 釉下混合彩蓮文大皿 愈期天 作

「釉下混合彩蓮文大皿」は蓮の花が美しく咲く水辺を表現するため、青い蓮の葉だけでなく背景の地の白となる部分に呉須の青を用いることでより水辺の様子が感じられるように、皿の下半分に吹墨技法を用いた。コンプレッサーを使ったグラデーションの青が蓮の葉と一体となり、より水辺の雰囲気を出し出すことに成功した。花と蕾の部分には酸化銅を使用して蓮の花弁の幻想的で柔らかな色合いを表現することで青色と対比させ、花を存在感のあるものとした。

全体の構図として葉の重なりを強調することで、画面全体の空間をより奥行きのあるものと感じさせることを意図した。手前、左、右の奥、その三か所の葉に銅顔料と鉄顔料の混合顔料を使用して、顔料の濃度を手前から奥に向かって薄くなるよう使った。そのことで、手前は銅顔料よりも鉄顔料の発色が濃く、鉄顔料の渋い発色がみられた。中間の濃度

図7のところは銅顔料と鉄顔料が同時に発色して、これまで見たことがない色がみられた。一番薄い所は鉄顔料発色の薄い青磁色の中に、銅顔料発色の赤色がみられた。

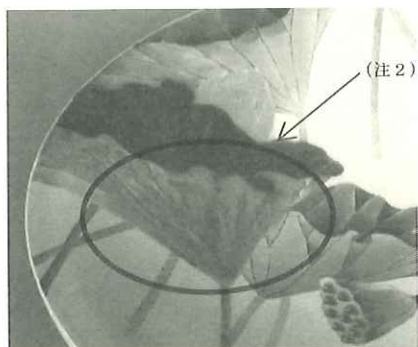


図7

図7では銅顔料と鉄顔料が同じところで発色することが可能であることが分かった(注2)。

その発色の色は日本独特の染付技法である「ダミ」によると考えられる。それは銅と鉄の比重の違いから来る。つまり、薄いダミの場合銅が先に流れ出し、その後に鉄が流れ出すことで色が変わると考えられる。また、銅を細かくする程度によっても発色に変化があることがわかった。

7. 結論

本研究は染付を歴史的に概観したときに見られる、釉下彩技法としての酸化鉄、酸化銅、酸化コバルトの使用をヒントに始めた。これまで染付技法としてコバルトの青のみで表現されていた中で、染付発生当時に見られた酸化鉄、酸化銅の同一画面における単独使用をヒントに、鉄顔料、銅顔料の混合という方法に一步踏み込んだ研究である。この研究には、顔料の混合のみの実験にとどまらず、実際にだみ筆による濃淡を描き出す技法を使うことで、これまで見られなかった色彩の変化という効果を得られた。この事はこれまで知られていないことである。このことによってこれまで単独で使用されていた酸化金属を混合することによる効果は作品制作の上で有効な方法であることがわかった。今後、他の酸化金属における混合顔料の可能性も示唆する研究となった。

謝 辞

本研究に当たり、たましん歴史・美術館中澤富士雄先生に指導を頂き、論文制作、作品制作において協力をしていただいた愛知県立芸術大学陶磁専攻梅本孝征先生、佐藤文子先生、福島由子先生、愛知県立芸術大学陶磁専攻大学院生野中雅博君に対し、ここに記して謝意を表したいと思います。

参考・引用文献

- 長谷部楽爾 2007 「唐宋の釉下彩」『東洋の鉄絵・鉄砂・銹絵』東洋陶磁学会第 35 回大会研究発表要旨 p. 2
- 黄鉉盛 2008 「韓国銅書磁器の化学技術的研究」『中央大学校第 83 回博士学位論文』 p. 1、 p. 7、 p. 7 ~ p. 8
原文は韓国語であるため翻訳し引用
- 井上喜久男 2007 「瀬戸・美濃の釉下彩」『東洋の鉄絵・鉄砂・銹絵』東洋陶磁学会第 35 回大会研究発表要旨 p. 5
- 鄭銀珍 2012 「朝鮮王朝の青花磁器の特質」『陶説』日本陶磁協会 p. 22
- 金益煥 2010 「朝鮮時代 白磁青画顔料の科学技術的研究」『中央大学校第 87 回博士学位論文』 p. 4、 p. 5 原文は韓国語であるため翻訳して引用
- 吉良文男 2007 「高麗時代の鉄絵」『東洋の鉄絵・鉄砂・銹絵』東洋陶磁学会第 35 回大会研究発表要旨 p. 4
- 加藤悦三 1987 「陶器の色と着色剤」『化学と教育 35 巻 6 号』 p. 505
- 三上次男 1986 『世界陶磁全集 21』小学館 p. 129、 p. 132
- 中島浩氣 1936 「多久系有田窯」『肥前陶磁史考』青潮社 p. 536
- 中澤富士雄 1985 「元染付研究の周辺」『元の染付展』大阪市立東洋陶磁美術館 p. 2
1999 「明代の陶磁器」『世界美術大全集 東洋編 明』 p. 250
1995 「元・明の青花」『中国の陶磁』平凡社 p. 85、 p. 91
- 岡野智彦 2000 「イスラム陶器の染付」『染付の粋』平凡社 p. 38
- 大橋康二 2012 「肥前磁器の展開」『初期伊万里柿右衛門鍋島』愛知県陶磁資料館 p. 4
- 鈴田由紀夫 1998 「江戸期における有田磁器の技法変遷表」『柴田コレクション(VI)』佐賀県立九州陶磁文化館 p. 278
2000 「青と白染付の色相」『染付の粋』平凡社 p. 32
2007 「肥前の鉄絵」『東洋の鉄絵・鉄砂・銹絵』東洋陶磁学会第 35 回大会研究発表要旨 p. 5

図

図1) 青花辰砂蓮花文壺 大阪市立東洋陶磁美術館蔵『浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美』 p.111
美術館連絡協議会より転載

Porcelain with lotus flower design in underglaze cobalt blue and copper-red Buwong-ri, Gwangju official kiln, Gyeonggi-do Joseon dynasty, second half of the 18th century. The Museum of Oriental Ceramics, Osaka (Gift of Mr. ATAKA Eiichi)

図2) 個人資料 (兪期天 制作)

図3) 同上

図4) 同上

図5) 同上

図6) 同上

図7) 同上

表

表1) 加藤悦三 1987 「陶器の色と着色剤」『化学と教育 35 巻 6 号』 p.505

表2) 同上 表に変えて引用

表3) 同上 p.504

表4) 個人資料 (兪期天 制作)

表5) 同上

表6) 同上

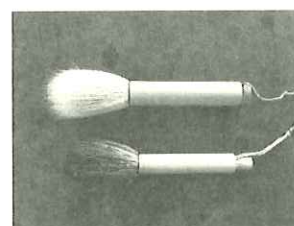
表7) 同上

表8) 津坂和秀 2003 『やきものをつくる釉薬応用ノート』 p.9

表9) 個人資料 (兪期天 制作)

(注)

(1) だみ筆と呼ばれる筆を使って広い面積を塗り込める技法である。日本では広い面積を塗り込めるだけでなく、だみ筆を使い、筆先にたっぷり水に溶かした顔料を含ませて、穂先に少し清水を含め描くことで、面をうめてゆく時に穂先の清水を含んだ薄い顔料から徐々に濃い顔料へと濃さの変化してゆく。このだみ筆による「暈し技法」は日本独特である。



(2) 白黒写真では分かりにくいですが、赤色と緑色が斑に発色しながらも一部分が赤く隣り合っている所が緑色に発色している。

NEW DEVELOPMENT OF “SOMETUKE” TECHNIQUE IN ASIA
-CERAMIC ART WORK USING MIXED PIGMENTS
OF AN IRON AND A COPPER PIGMENT-

AICHI PREFECTURAL UNIVERSITY OF FINE ARTS AND MUSIC

YOO, Kichun /OHTA, Kiminori

This paper took considerations into underglaze that are drawn by Chinese, Korean, and Japanese *gosu*, an iron and a copper pigment based on a historical perspective. According to these considerations, these three types of pigments were normally used singly but they have never been used as mixed pigments for underglazing ceramics. Such being with the situation, this study included an experiment in mixing an iron with a copper pigment and investigated the effects for manufacturing porcelain.

According to the result, the fact that copper pigments flow faster than iron pigments from a paintbrush because of the difference in the size of particles or specific gravity of iron and copper pigments was proved. Hence, this study proved that iron and copper pigments can produce each color at the same time when they are used in tiny space of paintings.

Accordingly, this paper suggests that using pigments mixed an oxidizing metal with the other metals that are difference in the size or the specific gravity produce many ways to make our works.

For relay the spirit and traditional requiem

Understanding about the Asian Ethno forming art

OKI, Michio

Sculptor, artist

ONE OF the important elements of the Asian ethno forming art is “respect and love expression to ancestors or the nature spirits”.

I’ve made installations mixed with natural motifs and played solemn performance in a traditional style *shimekomi*, at the exhibition place from 1982,.

Making things for paying homage to the nature, I and participant have an opportunity to be conscious of relation of visual arts, nature by popular method. I hope to visualize “relay the spirit” or “spiritual exchange of courtesies” as modern animism.

After 2004, I hold art projects expressed importance of beloved place, individual nature, and daily life at “The woods of *yanbaru*” with rich nature and also in a closed school in *Okinawa*.

I am conscious of forming “repose of souls” in recently. The trunk of an old big cherry tree and the memento of the deceased father who was a former officer, these were used to making mold for symbolic candles. It means at ease feeling the soul of nature and a human being. After the great disaster in 2011, making candle or clay bell in every year is to repose of souls and sustain a person’s spirits.



ART KAWASAKI 2007 Project: Spiritual intimate exchange *Sacrifice 2007*

「精神のリレー 鎮魂の灯りをともして」

— 「アジア民族造形についての理解」 覚書き —

彫刻家・アーティスト 大木 道雄

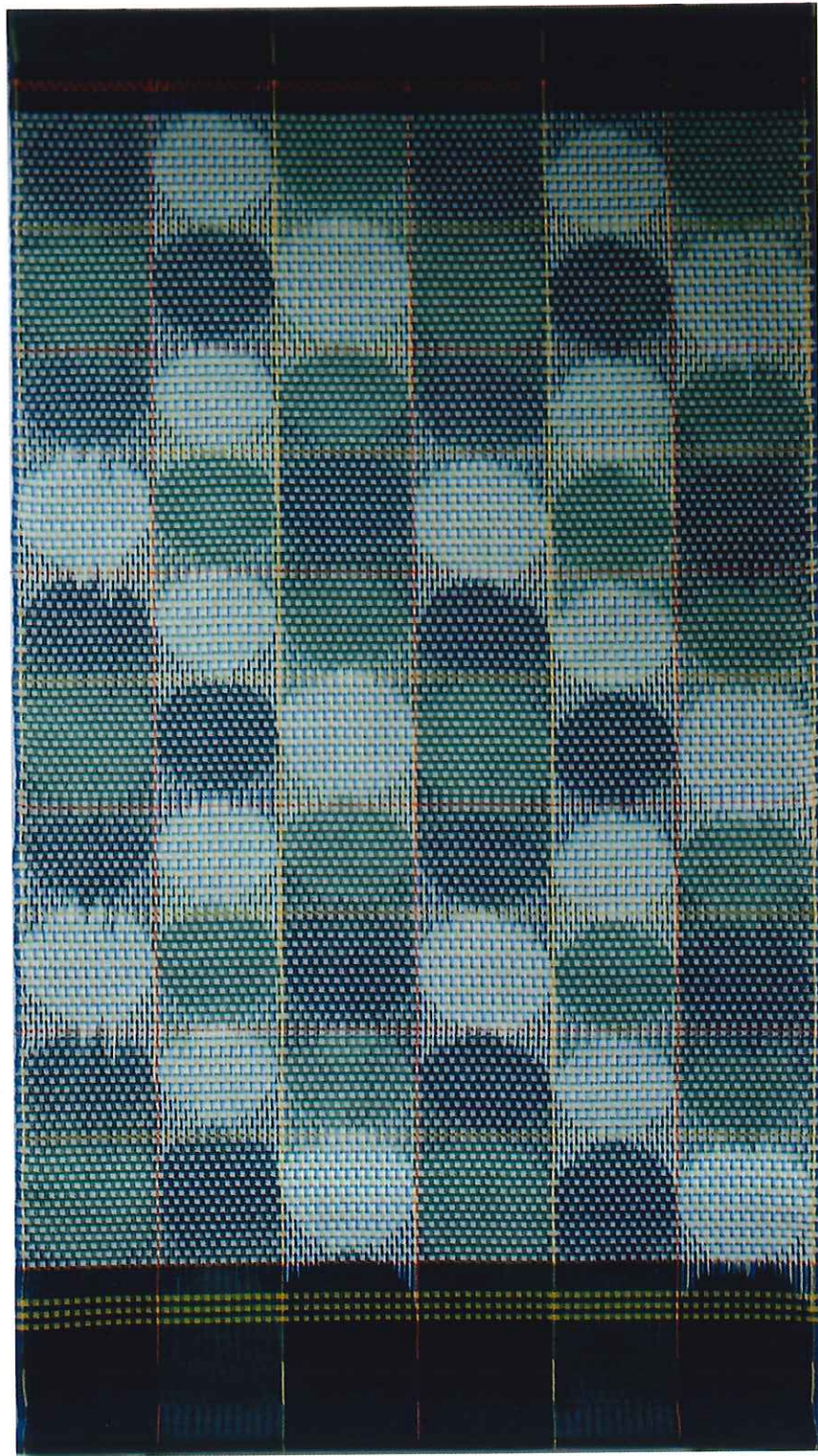
アジア民族造形の根幹をなす重要な要素の一つは「祖先や自然霊への敬意・愛情表現」であると私は考える。1982年以降の私の作品は、自然の一部を象った作品＋祭祀の担い手或いはシャーマンとして自ら締め込み姿で演ずるパフォーマンスで構成するものが多い。インスタレーションとパフォーマンスの融合した空間全体が作品なのだ。作品づくりに児童や一般の人々が簡単な手法で参加することで、民族造形と自然・人々の結びつきを意識する機会が生まれる。その時に太古から今に至る「精神のリレー」や「魂の交歓」を感じとってもらえることを私は願っている。

2004年以降は沖縄本島北部のかつては陸の孤島と呼ばれた集落の廃校や悠久の時を超え脈々と受け継がれる自然豊かな「やんばるの森」を作品の現場として、見慣れた場所・自然・人生の大切さを参加型作品に表現した。2005年には廃校の最後の生徒たちに、校庭の赤土 “マージ” で私が締め込む晒しの布を染めてもらったのだ。

さらに近年は「鎮魂」というテーマが加わった。人々から忘却された桜の巨木＋元軍人であった亡父の遺品を用いたキャンドル作品は、自然と人間の魂が安らぐことを意図している。樹齢数百年の桜や亡父が旧帝国陸軍の将校として着用した長靴を型取り、百余本のキャンドルを造って灯すと蠟が溶けだし大地へと滴り落ちる。古代、漢の詩人は悲哀の深さを象徴し「涙蠟」と詠んでいる。それはまた、埴谷雄高の『死霊』に登場する《愁いの王》が全ての存在を鎮魂するために流す血涙のようでもある。

2008年から7年間、毎年夏の公開講座を行う第一の理由は、過去の芸術活動で得た体験を人々と分かち合うためだ。生涯学習社会の推進に対応して「生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てる」ためにきわめて有効な方法でもある。

2011年3月以降は「鎮魂の灯り」や「鎮魂の鈴音」というテーマで公開講座を開き、一般の人たちとキャンドルや土鈴づくりをする。これは大震災によって喪失した多くの命や存在に対する思いを込めた創作である。私たちが今なお進行中の「大災害」と向き合い記憶にとどめることは、かならず一筋の光明となり次世代へとつながっていくに違いない。



森へ行こう

145.0 L × 77.0W cm

山本和子

制作する時、自然、森の循環、人との関わりを思うことがテーマになっている。森が芽吹きはじめ、モコモコと色彩豊かに茂ってゆく様子、水が滴る様子を表現した。

「森は生きている」「海は生きている」「地球は生きている」「人間が生きている」がいつまでも続くことを願っている。



草花 (和紙のはり絵)

145.0 L × 30.0W cm

簗 美代子

日頃、草花の観察を楽しみにしている。

最も「らしさ」「美しさ」を感じた時に採集して作品のモデルに選抜する。制作中も成長し変化するのでタイミングを大切にして、観察しながら直接和紙を切ったり、千切ったりして糊で止め、モデルを模作して構図を整えて色紙に貼付した。この色紙をかがり帯にとめて仕上げた。かがり帯は扱いやすくとても重宝している。



すえきふたつき
須恵器蓋坏

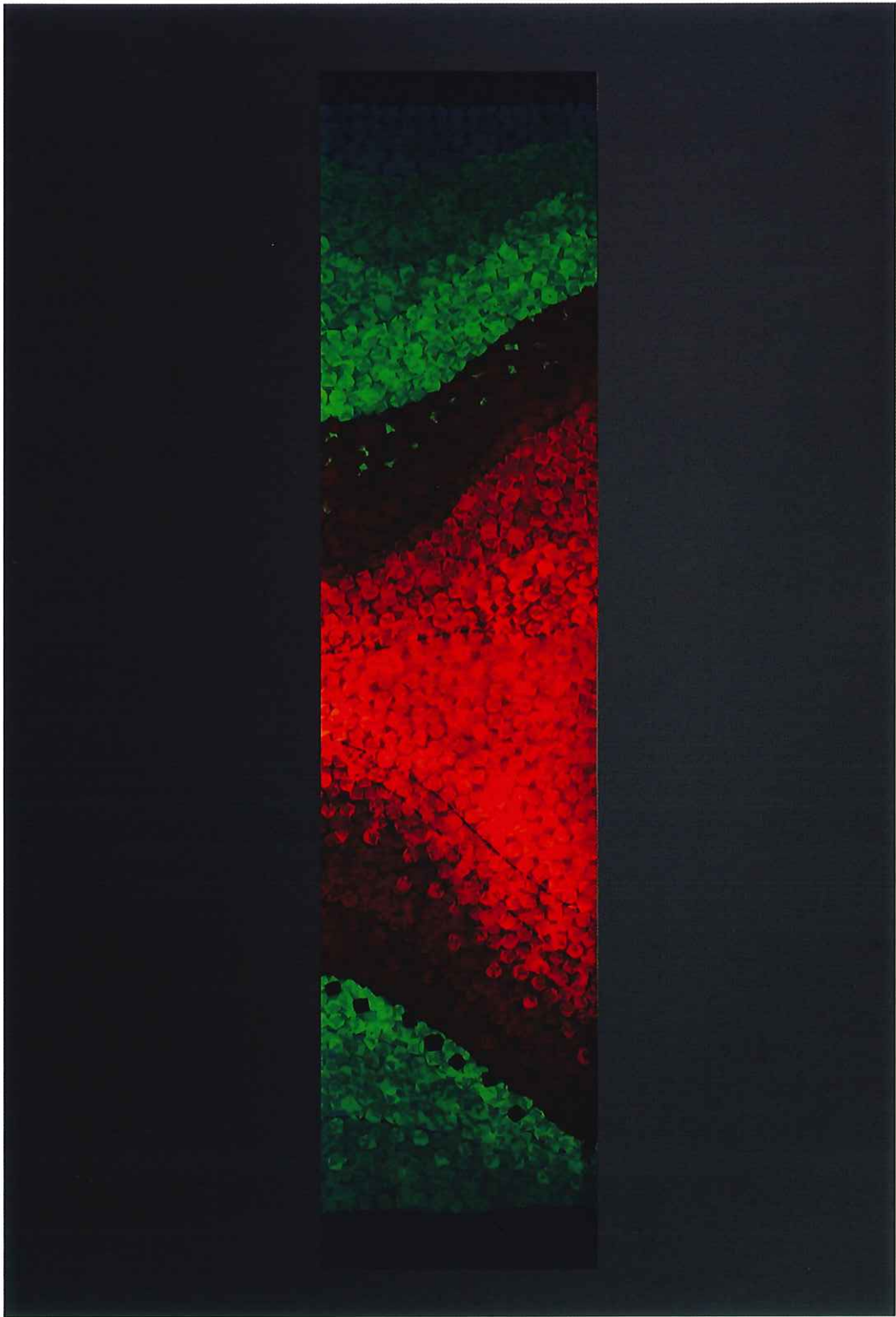
13.0 L × 13.0W × 6Hcm 西念秋夫

須恵器とは、450年堺市大庭寺に新羅大伽耶の陶工が開窯したのが始まりです。475年には百済の陶工が堺市高倉に開窯、479年に中国南朝宋の陶工も穴窯を伝えています。堺市泉北丘陵には、900基の窯が確認され、日本書紀には茅渟県陶邑と記されています。蓋坏は食物を入れ客に一つずつ配られていたと考えられ、古墳からは魚の骨や巻貝が入って出土します。陶邑は日本六古窯の出発点で、泉州の焼物として復元制作をしています。



コウモリの飛翔 振り子玩具 18.0 L×22.0 W×25.0 H cm 渋谷 寿

本作品は、糸に吊るされたコウモリを、意図的にぐるぐると回転させたり、前後に揺らせたり、右側柱の鉄板部に止まらせ、そこから飛翔させたりする事を楽しむ玩具です。コウモリの裏側と、ベース左側の円盤には希土類磁石を埋め込んであり、作品上部右側のノブを、前後に動したり、左右に回転させることにより、コウモリの複雑な動きを操作します。



深まり行く秋の森に置き去りにした心 162.0L × 34.0Wcm 大槻 圭子

錦秋の森に変わり行く季節の奏でる不思議なメロディーに誘われてこの不可思議な空間と時間の中に身を委ね、宙に浮いて彷徨い続ける。まるで違う宇宙に紛れ込んだように。気がつくといつもの空間に戻っていた。でも心はあの森に残してきてしまったようだ。私はいつでも好きな時にあの場所に戻れる気がしている。



結ぶ

118.0 L × 73.0 Wcm

伊藤陽子

「東北コットンプロジェクト」十分な働きは出来ないけれど、ここに参加する思いを作品にしたい。この心を受け止めて贈られた、大正紡績近藤健一氏製作のプロジェクト綿5% & オーガニックコットン95%の糸とその前段階のファイバー。手で撚って糸を作り、染め、モチーフを織り、括りの糸で繋ぎ作品にした。染めは信州の友人からのブルーベリー。庭摘みペパーミント、有機栽培うこん。種まき綿摘みに参加した仲間の思いも入っている。

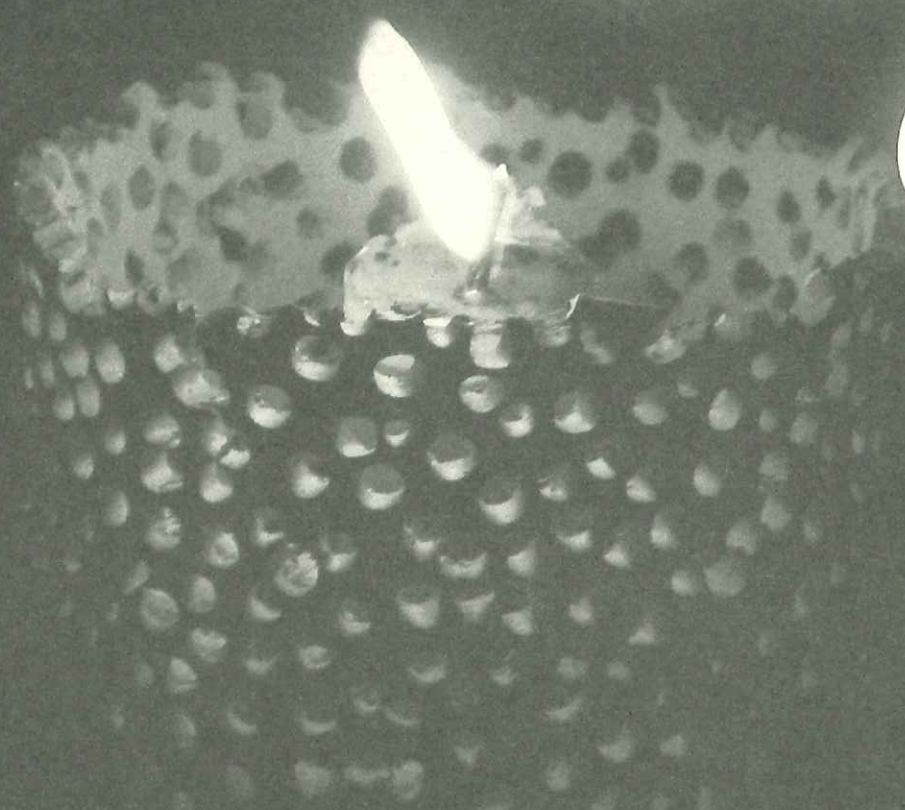
平成 25 年度アジア民族造形学会作品展示

平成25年度県立学校等公開講座(夏季)

陶芸入門

キャンドルスタンドなど器づくり

鎮魂の



灯り

日時▶① 7月27日(土) 9:00～17:00時(昼休み1時間)

② 8月10日(土) 9:00～12:00

作品返却▶8月24日(土) 9:00～10:00

※希望者には着払いによる宅配便発送

場所▶埼玉県立久喜北陽高等学校 工芸室・北陽寮(1階)

内容▶陶芸でキャンドルスタンドなど器を制作する

定員▶12名(定員を超えた場合は抽選)

指導▶埼玉県立久喜北陽高等学校 芸術科(美術) 教諭 大木道雄

費用▶500円(材料費・保険料)

持物▶汚れてもよい服装、飲み物、昼食(7月27日のみ)

申込期間▶7月1日(月)～7月19日(金)

参加条件▶2日間の連続受講が可能な方

申込方法▶往復はがきに、氏名(ふりがな)・住所・年齢・電話番号(メールアドレス)・陶芸経験の有無を明記の上、下記に送ってください

連絡先▶埼玉県立久喜北陽高等学校芸術科(美術) 教諭 大木道雄まで
〒346-0031 埼玉県久喜市久喜本837番地1

Tel: 0480-21-3334

平成 25 年度アジア民族造形学会中部支部活動報告

—アジア民族造形学会中部支部総会・講演会、中部支部会員展—

中部支部長 平中 学

総会・講演会

日 時： 平成 25 年 7 月 21 日(土) 13:30~16:00

会 場： 愛知県芸術文化センター 12 階 EF 室

参加人数： 総会（会員 11 名）

講演会（会員 10 名、一般 1 名）

■総 会： 13:30~14:00

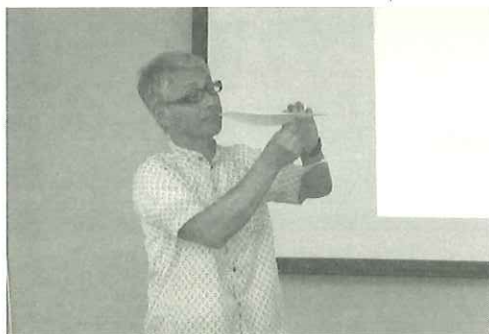
- 1)平成 24 年度事業報告
- 2)平成 25 年度事業計画案
- 3)平成 24 年度会計報告、監査報告
- 4)平成 25 年度予算案
- 5)その他

■講演・ワークショップ： 14:10~16:00

「モビールの可能性」

■講師 平中 学 氏 中京学院大学中京短期大学部教授

講演会・ワークショップではモビールの製作に挑戦しました。モビールは 20 世紀になって彫刻の概念を覆す「動く彫刻」として作り出されたが今や美術界にとどまらず商品のディスプレイや乳幼児の視覚的刺激としても広く一般社会にも普及し、教育現場でも活用されている。蓮の華に魅了された平中氏は、仏に供養するための華を散布する「散華」をモビール作品にして、支部会員展でも展示発表されました。当日は朝どりの蓮の花を見ながら、木曾檜の突き板に花びらを描き、木目の方向にも注意しながら切り抜きました。その後バランスをとるための穴の位置や糸の長さなどの指導を受けながら、蓮華をモチーフにしたモビールを完成させました。わずかな風でも動いて形が変わるモビールには多くの可能性を感じました。(文責 鈴木妃美子)



講師の平中学先生



完成したモビール作品

中部支部会員展

日 時： 平成 25 年 7 月 17 日（水）～7 月 21 日（日）

場 所： 愛知芸術文化センター 12 階 アートスペース H

出品者： 伊藤陽子、太田公典、河村瑞江、北川剛一、柴村恵子、渋谷寿
鈴木妃美子、千田百合子、富田正子、成田公子、篠美代子、平中学
平林美佐子、堀祥子、松本貴志子、宮川達也、山田美智子、山本二美恵

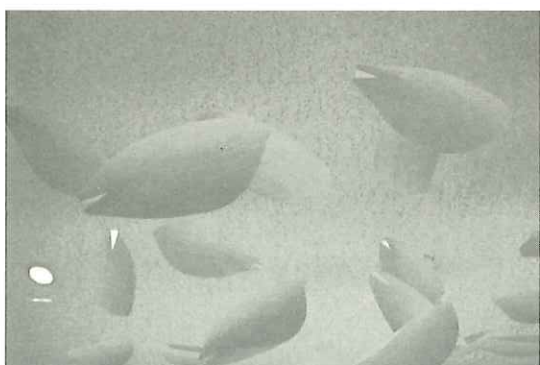
会員の造形に対する研究活動の高揚と、広く一般の方にも紹介することを目的として隔年で開催しています。展示会場は愛知県美術館を併設しているため、一般の方にも多く来場していただきました。展示内容は衣や食に関する調査研究、糸と織、陶器や木彫の作品、モビール、木の玩具、ヘア（髪）のアート作品など多岐にわたり、18 名の会員が発表しました。



中部支部会員展の会場



斬新なヘアアートの作品（平林美佐子）



天井から吊るしたモビール作品（平中学）



肝木文面取り大鉢（太田公典）

2014年度 理事会

2014年7月4日 11時30分—14時30分

品川・プリンス ホテル 38階食堂

出席： 金子量重、平野鍾、日原もとこ、大槻圭子、小島貞二

会長に委任： 山本悦夫、渋谷 壽、平中 学、中村次郎

欠席： 塚田哲夫（入院中）

議題： 1. 事務局廃止の件

（註：昨年度の理事会で、1名の事務局員に重要な会費の収支を任せるのは問題、不明朗の原因となる憂い有り。よって会則第11条「会の事務局は〒193-0941 八王子市狭間町 1994-72 星野方におく」は廃止。爾来事務局は理事が交代で行う）との会長の提案により廃止が決まる。さらに本年6月会長は本人に事務局閉鎖のため、担当者星野厚子に対し、早急に現在の会員名と会費納入状況、会計の収支、通帳などを整理し、学会印、会長公印を速やかに平野会長代理に提出するように命じた。それに対する誠意ある回答はなかった。もはやかかる会員の存在は健全な会の発展には大きな妨げとなる。先般、平野会長代理が請求したが、理事会の決定がなければ返さないと星野厚子の態度に理事を罷免、副会長と事務局員を解任、理事会は毅然と決定し、健全明朗な状態に戻したい。会計報告が完全に終了したと、平野会長代理が認めた時、学会を正常な状態に戻す妨げとなる星野厚子は除名する。

2. 本会創立の基本理念に立ち戻り、目的を正しく理解し、研究者及び作家の未来への発展に向けた会則を新規に作成（配布資料を参照）

3. 本年度開催の長野支部での大会の件

塩原和子さんのご努力で、塩尻市で開催準備が整った。本部からも下見に行ったが、郷土愛に満ちた塩原氏のご努力を高く評価したい。大会の細部についての中村委員長の具体的な説明が未だにない。なぜか？果たして大会は着実に行われるのか、彼の曖昧な態度にあきれ果てる。理事の覚悟が必要。

4. 「アジア民族造形学会誌」は約90万円の収入に対し、70万円が長年何の躊躇もなく支出されてきた。これに対する事務局担当者はもちろん事務局に任せきりの理事会の責任は重い。渋谷編集長のご努力は高く評価したい。東京の出版社から刊行する旨を述べると快諾。事務局はこの重大事に全く無頓着。これでは会は破産する。それを案じ会長は平野会長代理と百年書房（代表取締役藤田昌平氏）と会談し、半額で出版が可能を確認。急遽原稿を同氏に渡す。造形部会の原稿は大槻圭子造形部会長が同氏と相談の上進めている。7月10

日締め切りで、8月31日ぎりぎりの発行か。これも事務局担当者の不祥事が原因で急遽出版先を変えたためで止むを得まい。

以上

新会則は2014年7月4日の理事会で議決、直ちに発効。

新役員は下記の通り：(2014年度)

会長 金子量重

会長代理 平野 鍾、

副会長 大槻圭子

理事：金子量重（議長）、平野 鍾、大槻圭子、山本悦夫、

日原もところ、小島貞二、平中 学、中村次郎

7月4日の理事会で承認、即日発効

会員消息

中村次郎

退会

星野厚子

除名

アジア民族造形学会

会則

第1条 本会は金子量重創設・運営のアジア民族造形文化研究所附属アジア民族造形学会という。通称アジア民族造形学会という。英語名は Asian Ethno-Forms Society とする。

第2章 設立の基本理念は、研究所及び学会の創立者金子量重が過去半世紀にわたり、東北、東南、南、西アジアの全域を探訪し、アジアの国々を基盤で支えているのは、少数民族であることを確認。彼らの各集落に入り寝食を共にし、あるいは遊牧移動民のテントを訪ね歩いた。その暮らしの様態をつぶさに観察し調査研究した上で、彼らが日々用いる“もの”にこそ、アジア諸民族の本質が潜むと確信できた。それらを具体的に証明する衣、食、住、信仰・儀礼、学び、芸能、遊び、生産・交易の8主題に焦点を当て収集に努めた。それらは過去に日本の研究者や国立博物館も収集しない“もの”ばかりの貴重な資料だった。これらは人類共通の財産との信念のもとに、個人の所有に留めず要請に応え韓国中央(2002)、九州国立(2003)、ベトナム民族(2006)の各博物館へ寄贈した。各館ともに金子量重記念室を開設し、国民のアジア認識の高揚に貢献している。

これらの貴重な資料に対し、金子創立者は、明治以降西欧渡来の個人作家の作品を対象に、観賞や値上がりを目的にした“美術”の用語を排した。すべての“もの”は人間の日々の暮らしに欠き得ない重要な存在である。“もの”造りの原点なるが故に「造形」と定め、それに国々を基盤を支える「民族」を合体し、研究対象地域の「アジア」を冠し、『アジア民族造形学』を創設した。

国連「アジア無形文化財国際専門家会議」(ベトナム、ハノイ)に、日本代表として出席した折各国代表の認識も得た。同時にアジアの国立博物館は自国の展示に留まらず、未来に向けてアジア相互認識高揚のために、周辺諸地域の民族造形の展示を積極的に推進すべき旨を提案。まずベトナム民族学博物館のグエン・ヴァン・フイ館長、続いてフィリピン国立博物館のセラフィン・キアソン館長が賛成し、東南アジア各国代表も賛意を表明した。

明治以来の西欧の価値観一辺倒の旧態依然とした研究法や造形活動から離脱し、日本と最も関わりの深い、アジア諸民族の生活文化との関連性。即ち日本文化の源流がアジアのいずれの地域や、民族とどう繋がるかの探求を行う。《例えば、伊勢神宮の神殿(高床平入り)の源流が、タイやミャンマーのカレン族の米倉に求められるように。鳥居はタイ・アカ族の魔除けの門(ロココン)、『源氏物語』に登場する「龍頭鶴首の船」の“鶴”はミャンマーの先住民ピウー族の象徴、「ヒンダ」に遡る。ことを金子量重が確かめたように》

- 第3条 会員はすべて上記の基本理念を正しく理解し、アジア各地の優れた民族造形を素材に独自の研究の確立を推進する。それらを手本に、各自の専門領域の造形活動に有効に活用し造形感覚を豊かにし、優れた造形技法の開発に努め展示を行い世に問う。
- 第4条 学会運営のために、会長は研究所長が兼任。会長代理は研究所副所長が兼任する。会長不在の時は代行し、経理を担当。副会長1名を置く。会長は本会を代表し会務を統括する。会長代理及び、副会長は会長が任命し会長を補佐する。学会を合理的に運営するために理事を置くが、少数精鋭主義を貫き研究所員若干名と支部長で構成する。会長は会を代表し、理事会の議長を務める。会務の処理は理事が分担する。理事会の議決は出席者の2分の1の賛成を持って成立する。
- 第5条 本会の運営に要する費用は、会費及び寄付金を当てる。会員は下記の会費を納入する。
- 正会員 年額1万円（但し学生は7,000円）
賛助会員 年額5万円
- 納入した会費は返済しない。
会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第6条 大会は年に一度開催し、理事会は大会委員長を任命する。委員長は、開催日や会場、研究及び展示発表者を募り参加費などを徴収するなどの詳細を理事会に諮った上で、大会のすべてを司り実行の任に当たる。会計に関する事項は平野会長代理の承認を得る。
- 第7条 本会が基本理念から逸脱した場合は会を解散する。また会の運営を妨げ名誉を傷つけた者に対し、会長及び理事会は除名または退会を命じる。
- 第8条 会則の変更は会長が理事会に諮って決し、総会で会員に報告する。

会則の新規制定は平成26年7月4日の理事会で決した

会則に従って新役員は下記の通り：7月4日発効

顧問 広 正義
会長 金子量重、会長代理 平野 鍾 副会長 大槻圭子
理事 金子量重、平野鍾、大槻圭子、山本悦夫、日原ともこ、小島貞二、
平中 学、 中村次郎

以上

表紙装幀：大槻圭子

表紙写真：乾漆釈迦如来像頭部（高 116cm） 韓国国立中央博物館金子量重室蔵

ミャンマー、パガン、ビルマ族 16世紀

柔らかな眼差し、わずかに笑みを浮かべ口元に見られる初々しさは、ふと釈迦の少年時代を彷彿させる。因みに南の佛像の顔は細身に造られるが、北の顔はふっくらとしている。ミャンマーの漆塗り佛像の編年は、先住民の佛教徒ピューやモン族を倒したビルマ族は、彼らに学び佛教王国を創設したパガン朝(10-13世紀)に始まる。さらにピンヤ(14-16世紀)、アヴァ(16世紀)、コンバウン(17-18世紀)王朝へと続く。パガン国立考古学博物館には部分的に破損した乾漆立像(細身=1300cm、13-4世紀)がある。然し「乾漆佛頭」ほどの尊厳さを保つ佛さまは、どの国立博物館にも見られなかった。これは1980年代にバンコクのチャオプラヤ河畔に立つ骨董街(5階建て)で、佛様に呼びとめられ見惚れて購入した靈性と神秘さが入り混じった尊い思い出がある。いつの日か語ろう。(金子量重)

アジア民族造形学会誌 第14号

Journal of the Asian Ethno-Forms Society Vol.14

平成26年8月31日発行

編集 金子量重 平野鍾 Ed.KANEKO,Kazushige HIRANO,Atsumu

発行 金子量重 Pub. KANEKO,Kazushige

発行所 アジア民族造形学会◎

〒186-0002 東京都国立市東4-24-20-504 (平野方)

Tel&Fax:042-576-7735

制作 株式会社百年書房

〒130-0026 東京都墨田区両国2-17-19-PAZ両国4F

Tel:03-6666-9594 Fax:03-6666-9433

TREATISES

Asian Ethno-Forms Iron;

A Perspective on the North Route Hidden in Safflower Introduction Common Belief

HIHARA Motoko

Prayers for Safety and the Culture of the Mogari Riverboats

KIKUCHI Kazuhiro

New Development of "SOMETUKE" Technique in Asia

-Ceramic Art Work Using Mixed Pigments of an Iron and a Copper Pigment-

YOO Kichun

/ OHTA Kiminori

Asian Ethno-Forms Society
TOKYO JAPAN